

目次

■ 第39回(2016年)日本分子生物学会年会 開催のお知らせ(その1) —	1
【年会のコンセプト】	1
【年会組織】	1
【プログラム概要】	2
【シンポジウムの企画公募について(3月22日(火)受付締切)】	9
【日程表(予定)】	12
■ 第38回日本分子生物学会年会(BMB2015)開催報告 —————	13
■ キャリアパス委員会 年会企画報告 —————	14
■ キャリアパス委員会 年会における発表者の属性統計調査報告 ———	34
バランスの取れた研究環境を築くために~2015属性調査から学べること~	
■ 「女子中高生夏の学校2016」実行委員募集のお知らせ —————	35
■ 第19期第2回理事会記録 —————	36
■ 平成28年度(第38回)通常総会記録 —————	43
■ 平成27年度(2015年度)決算報告 —————	45
■ 監査報告書 —————	51
■ 平成28年度(2016年度)活動予算書 —————	52
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について —————	54
■ 研究助成一覧 —————	54
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ —————	58
○未来を拓く高圧力科学技術セミナーシリーズ(41)	
「生命科学における高圧力研究の異分野融合」	
○第18回マリンバイオテクノロジー学会大会	
○The 14th International Conference on Near-field Optics, Nanophotonics and related Techniques (NFO-14)	
■ 第19期役員・幹事・各委員会名簿 —————	60
■ 賛助会員一覧 —————	61

Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida

Frequency: Monthly | Impact Factor: 2.805

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界9,000以上の機関で読まれており、年間224,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。



Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 2015年からの完全オンライン化でカラー掲載料がなくなりました
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への掲載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- オープンアクセス希望者はオプションで『Online Open』(有料)を選択できます
- 2012年9月以降の総説は日本分子生物学会のサポートを受け OnlineOpen で公開中

オンライン投稿はこちら

<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2013年・2014年出版 引用数TOP論文 *2015年12月現在。

Efficient TALEN construction and evaluation methods for human cell and animal applications (Volume 18, Issue 4)
Sakuma, T; Hosoi, S; Woltjen, K; Suzuki, K; Kashiwagi, K; Wada, H; Ochiai, H; Miyamoto, T; Kawai, N; Sasakura, Y; Matsuura, S; Okada, Y; Kawahara, A; Hayashi, S; Yamamoto, T

Structures of D14 and D14L in the strigolactone and karrikin signaling pathways (Volume 18, Issue 6)
Kagiyama, M; Hirano, Y; Mori, T; Kim, S.Y; Kyozuka, J; Seto, Y; Yamaguchi, S; Hakoshima, T

Efficient identification of TALEN-mediated genome modifications using heteroduplex mobility assays
(Volume 17, Issue 3) *Ota, S; Hisano, Y; Muraki, M; Hoshijima, K; Dahlem, T.J. Grunwald, D.J; Okada, Y; Kawahara, A*

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。

ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。
日本分子生物学会事務局: info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、
Wiley カスタマーサービスにて承ります。
Wiley カスタマーサービス: cs-japan@wiley.com



WILEY

第 39 回 (2016 年) 日本分子生物学会年会 開催のお知らせ (その 1)

会 期：2016 年 11 月 30 日(水)～ 12 月 2 日(金) (3 日間)
会 場：パシフィコ横浜
年 会 長：一條 秀憲 (東京大学大学院薬学系研究科)
演 題 登 録 期 間：2016 年 7 月 1 日(金)～ 7 月 29 日(金)予定
事 前 参 加 登 録 期 間：2016 年 7 月 1 日(金)～ 10 月 14 日(金)予定
*サーバーメンテナンス等の関係で前後する可能性があります
年会事務局連絡先：第 39 回日本分子生物学会年会事務局 (株)エー・イー企画 内)
〒 101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 岩波書店一ツ橋別館 4 階
Tel : 03-3230-2744 Fax : 03-3230-2479 E-mail : mbsj2016@aeplan.co.jp
年会ホームページ：<http://www.aeplan.co.jp/mbsj2016/>

【年会のコンセプト】

「半端なベクトルに出口無し！～徹底した基礎研究から広がる応用～」

科学研究におけるいわゆる「出口」とは、一般には人や社会に直接役立つ成果ということになるのでしょうか。基礎研究も、大なり小なり出口もしくは出口に繋がる成果を目指すのは当たり前のことだと思います。しかしその一方で、日本の研究体制が、強く固定された出口に向かうためだけの研究費や研究組織ばかりになってしまうと、基礎研究を志す若者の士気は下がり、疲弊し、興味は半減し、いずれ科学研究全体が活力を失ってしまうことが心配されます。科学における真理の探究は、何ものにも邪魔されない自由な方向性の追求が許容されてはじめて爆発的な力を発揮するものだと思います。出口に誘引されて方向が変われば、力が減ずるのは自明。その結果として生じる中途半端なベクトルではどんな出口も見つからなくなることもあるでしょう。年会長を務めるに当たっての願いは、日本最大級の生命科学研究 society である分子生物学会の年会在、ひたすら基礎研究に徹することの楽しさと底力を再確認できる場になってくれることです。基礎研究は中途半端に出口を語る必要などなく胸を張って基礎に邁進すれば良く、応用研究はしっかりとした基礎研究をベースに evidence-based もしくは mechanism-based な研究成果を発表する機会と捉えてもらえれば幸いです。本年会を、オーソドックスに研究発表と討議に没頭できる場にしたいと思っております。

第 39 回日本分子生物学会年会
年会長 一條 秀憲
(東京大学大学院薬学系研究科)

【年会組織】

〈組織委員会〉

年 会 長：一條 秀憲 (東京大学)
組織委員長：三浦 正幸 (東京大学)
組 織 委 員：新井 洋由 (東京大学)
後藤由季子 (東京大学)
多田 秀明 (小野薬品工業(株))
富田 泰輔 (東京大学)
村田 茂穂 (東京大学)
庶務幹事：名黒 功 (東京大学)

〈プログラム委員会〉

プログラム委員長：村田 茂穂（東京大学）

プログラム委員：新井 洋由（東京大学）

五十嵐和彦（東北大学）

石野 史敏（東京医科歯科大学）

稲田 利文（東北大学）

井上 治久（京都大学）

上田 泰己（東京大学）

小川 佳宏（東京医科歯科大学）

木村 宏（東京工業大学）

倉永英里奈（理化学研究所）

古関 明彦（理化学研究所）

後藤由季子（東京大学）

佐藤 健（群馬大学）

菅澤 薫（神戸大学）

武田 弘資（長崎大学）

泊 幸秀（東京大学）

中島 欽一（九州大学）

夏目 徹（産業技術総合研究所）

西村 栄美（東京医科歯科大学）

濡木 理（東京大学）

原 英二（大阪大学）

東山 哲也（名古屋大学）

平尾 敦（金沢大学）

深川 竜郎（大阪大学）

藤田 恭之（北海道大学）

堀 昌平（理化学研究所）

本田 賢也（慶應義塾大学）

間野 博行（東京大学）

山本 卓（広島大学）

【プログラム概要】

◆プレナリーモーニングセミナー

各日 8:00～8:45（予定）に、業績顕著な国内外の研究者によるセミナーを開催いたします。

〈予定講演者〉

Robert Parton（Institute for Molecular Bioscience, The University of Queensland, Australia）

巖佐 庸（九州大学大学院理学研究院 生物科学部門 数理生物学教室）

田中 啓二（公益財団法人 東京都医学総合研究所 蛋白質代謝研究室）

西道 隆臣（理化学研究所 脳科学総合研究センター 神経蛋白質制御研究チーム）

宮園 浩平（東京大学大学院医学系研究科 病因・病理学専攻 分子病理学分野）

渡邊 嘉典（東京大学分子細胞生物学研究所 染色体動態研究分野）

◆指定シンポジウム（全 28 テーマ）

プログラム委員による指定シンポジウム 28 企画の開催を予定しております。

オルガネラ連携とシグナル伝達のクロストーク

Emerging function of inter-organelle communication in signal transduction

オーガナイザー：新井 洋由（東京大学）

真核細胞は恒常性を維持するために、様々な細胞内シグナル伝達経路を発達させてきた。関与する分子の細胞内局在が解明される中で、シグナルは必ずしも細胞膜から発生する必要はなく、真核細胞の特徴であるオルガネラ（膜）を起点としたシグナル伝達経路の存在が多くのケースで明らかになってきた。さらに、単独のオルガネラだけではなく、小胞輸送を介したオルガネラ間の連携により、細胞内シグナルの発生／消去が制御されている巧妙なケースも明らかになりつつある。本シンポジウムでは、オルガネラ連携による細胞内シグナル伝達経路の制御に焦点をあて、一線で活躍する研究者に最新の話題を提供して頂く。

RNA 修飾によるエピトランスクリプトーム制御

Epitranscriptome regulation by RNA modifications

オーガナイザー：五十嵐 和彦（東北大学）

RNA 修飾酵素は進化上最も良く保存されたタンパク質群の一つであり、エピゲノム制御の原型は RNA 修飾制御であった可能性も考えられる。しかし、RNA 修飾の生理的機能は未だよく理解されていない。近年、rRNA や tRNA のみならず、mRNA や miRNA も高頻度にメチル化を受けることが明らかになった。メチル化などの RNA 修飾は当初、二次構造の観点から注目されてきたが、メチル化 RNA リーダータンパク質の存在も明らかになり、転写後制御に重要な役割を担うことが明らかになりつつある。本シンポジウムでは、RNA 修飾の「書き込み」と「読み取り」、生理的意義や病態への関与を中心に最新の研究成果を共有し、今後の課題について討論したい。

ゲノムにおける未知の機能を探る

Potential function of the genome

オーガナイザー：石野 史敏（東京医科歯科大学）

ヒトゲノムにおいてタンパク質をコードする遺伝子は 1.5% だけで、約半数はレトロトランスポゾンで占められている。一方で、ゲノムの大部分の領域が RNA に転写され、それらの中には non-coding RNA や miRNA として機能するものがあると考えられている。また、プロモータ、エンハンサ、サイレンサ、インスレータや転写因子結合サイトなどの機能を果たす調節性機能をもつシス配列もゲノム機能の重要なものとして認識されている。しかし、ゲノム機能の完全な理解には、未知の機能をもつ未同定配列の研究が必要である。そのようなアプローチを行っている研究者の方に、それらの進化的意義とともにご紹介いただく。

発現制御装置としてのリボソームの新機能

Novel regulatory roles of ribosomes in global gene expression

オーガナイザー：稲田 利文（東北大学）

リボソームは単なるタンパク質合成装置ではなく、正確な遺伝子発現に必須な機能を果たす発現制御装置である。細胞の分泌活性に応答した分泌装置の発現調節、正確なタンパク質フォールディング、ER 等へのタンパク質輸送における、翻訳伸長の厳密な速度調節の機能が次々と解明されている。また、様々な異常翻訳を感知して特異的なリボソーム修飾がおこり、異常タンパク質や異常 mRNA が迅速に分解される品質管理機構の分子基盤が解明されつつある。本シンポジウムでは、リボソームプロファイニング等の新規手法により新たな翻訳制御機能を解明している国内外の講演者の最新の研究成果を紹介し、発現制御の中心装置としてのリボソームの機能に迫りたい。

iPS 細胞を用いた疾患研究

Disease research using iPSC technology

オーガナイザー：井上 治久（京都大学）

iPS 細胞は、ES 細胞と同様に、無限に増殖し、内・中・外の三胚葉それぞれの細胞へ分化することができる、多能性幹細胞である。このような多能性幹細胞を、患者体細胞から作出することが可能となり、疾患研究に利用されている。患者 iPS 細胞から分化誘導して得られる疾患細胞は、生理的な遺伝子発現環境における、病態を反映している。また、孤発性病態のモデリングなど、全く新しい疾患解析プラットフォームとなりうる。さらに、iPS 細胞技術のコンセプトである遺伝子発現による細胞の運命変換を *in vivo* で行うことにより、疾患研究への応用が進んでいる。本シンポジウムでは、iPS 細胞技術を利用した代謝、神経、骨、内分泌、癌など、各分野の疾患研究について、ご発表いただく。熱い議論を期待したい。

全細胞解析が拓くマイノリティ細胞研究

Minority cell research enabled by whole-body/whole-organ cell analysis

オーガナイザー：上田 泰己（東京大学 / 理化学研究所）

従来の生命科学は無作為抽出した標本から得られるデータを用いて、統計的に母集団の「平均特性」とその「ばらつき」を解析するという手法を取っていた。これはひとえに母集団全てを解析することが技術的に困難だったからに他ならない。しかし、今や個体を構成する全細胞の状態を包括的に解析することが実現しつつある。このような全細胞解析は、統計学に依拠した従来法が解析対象から排除していた生命現象を扱うことを可能にするだけでなく、「平均描像」の理解に留まる従来科学に対するアンチテーゼを露呈する。そこで本シンポジウムでは、全細胞解析の技術的現状と課題を俯瞰し、全細胞解析によって切り開かれる未来の生命科学について議論する。

エピゲノム制御：疾患発症における意義

Epigenomic regulation: its pathogenic implication

オーガナイザー：小川 佳宏（東京医科歯科大学）

糖尿病などの生活習慣病やがんは遺伝素因と環境要因の複雑な相互作用により発症する代表的な多因子疾患であるが、その発症機構には不明の点が多い。DNA やヒストンのエピゲノム修飾は、塩基配列の変化を伴わずに遺伝子発現を変化させるため、外的な環境要因に対する細胞の適応機構として注目されている。一方、環境要因によりもたらされるエピゲノム変化はしばしば比較的安定であるため、多くの疾患発症に関与すると考えられており、これを標的とした新しい治療戦略の開発が期待される。本シンポジウムでは、代謝疾患、がん、老化に焦点を当てて、疾患発症のエピゲノム制御機構に関する最新の知見を議論したい。

ヌクレオーム（網羅的細胞核）研究の幕開け

Dawn of "Nucleome" Research

オーガナイザー：木村 宏（東京工業大学）

近年、顕微鏡技術や画像解析技術、ゲノム解析技術などが飛躍的に進歩し、ゲノム機能発現の場である細胞核の構造とそのダイナミックな変化を網羅的かつ定量的・数理的に解明しようという気運が国際的に高まっている。実際、細胞核 (nucleus) の包括的 (オミクス:omics) 研究を意味する「ヌクレオーム (nucleome)」という言葉が使われ始め、米国 NIH で“4D Nucleome”プロジェクトが開始された。また、米国、EU、日本の研究者により国際ヌクレオームコンソーシアム (International Nucleome Consortium) の発足が検討されている。本シンポジウムでは、「ヌクレオーム (包括的細胞核)」という新規分野の研究の原状と将来展望について議論する。

生き物の形を織りなす 細胞の力学特性と分子メカニズム

Cellular and Molecular Dynamics for Morphogenesis

オーガナイザー：倉永 英里奈（理化学研究所）

一つの細胞から生き物を形づくる過程で、組織は単純から複雑へと変化を遂げる。組織の折りたたみや変形といった複雑化の第一歩は、組織を織りなす個々の細胞のふるまい（細胞極性や骨格・形状の制御など）に起因することが明らかになってきた。細胞の力学的変化を誘導（またはそれに応答）する分子メカニズムがどのようにして組織を動かすのか、そのダイナミクスを理解するために、分子-細胞-組織の階層を物性でつなぐ次世代の研究分野が注目されている。本シンポジウムでは、さまざまな生物・器官の形態形成とそれを成し遂げる細胞動態や力学特性に関して、ユニークな観察、計測、解析技術でアプローチする挑戦的かつ先駆的な研究内容を紹介する。

CpG アイランドの生物学

Dissecting CpG islands

オーガナイザー：古関 明彦（理化学研究所）

CpG 配列は、シトシンのメチル化修飾を介してエピジェネティック制御の重要な要素となるだけでなく、そのゲノム局所への集積によって CpG アイランドを形成することによっても、ゲノム機能の制御に大きく寄与する。特に、長い CpG アイランドは、Hox など形態形成や発生過程に寄与する遺伝子群とポリコム群を介してリンクされることが最近見出されて、CpG 配列には維持メチル化のホストとしての役割が与えられていることが示唆され始めている。CpG 配列が、メカニカル、あるいは、進化論的にどのように取り扱われているのかについて、議論したいと考える。

神経細胞の誕生と初期神経回路形成の分子メカニズム

Generation of neuronal subtypes and initial steps of circuit formation

オーガナイザー：後藤 由季子（東京大学）

中枢神経系においては、まず様々な種類のニューロンとグリア細胞が産生され、それらが正確に配置されて初期ネットワークを形成する。この過程は、胎生期・発達期ならびに成体の神経幹細胞の運命制御、ニューロンやグリア細胞の移動、樹状突起ならびに軸索の発達、シナプス形成など多くの素過程が正確に制御されることで初めて可能になる。本シンポジウムはこのような神経発生の初期過程の分子メカニズムに焦点を当て、最新的话题をご提供いただく予定である。

メンブレントラフィック研究の新時代

New Era of Membrane Traffic Research

オーガナイザー：佐藤 健（群馬大学）

メンブレントラフィックは、単に細胞内における分泌やエンドサイトーシス、オートファジー等の制御のみならず、発生や内分泌・代謝、神経機能等の高次生命現象においても重要な役割を担っている。近年、その詳細な分子メカニズムが解明される一方、多細胞生物における新たな生理機能も明らかとなりつつある。また、超解像ライブイメージングシステム等の新たなテクノロジーの発展とともに、今まで観ることのできなかつたメンブレントラフィックの真の姿が明らかとなりつつある。本シンポジウムでは、様々な生物や手法を駆使することによってメンブレントラフィックの新たな局面を切り開いている研究者の方々に、分子レベルから個体レベルまで広く最新のトピックスをご紹介いただき、議論する。

遺伝情報の維持と進化のトレードオフ

Trade-off between maintenance and evolution of genetic information

オーガナイザー：菅澤 薫（神戸大学）

様々な内的・外的要因によって絶えず発生するゲノム DNA 損傷に対し、生物は DNA 修復機構を駆使することで突然変異や染色体異常、細胞死等の弊害を回避すると考えられてきた。一方、近年の研究の進展から、少なくともある種の DNA 修復機構は本質的に不正確であり、細胞の生存を優先するために遺伝情報の安定維持を犠牲にすることが示されている。このようなゲノム維持戦略は、がんをはじめとする種々の疾患・病態と関連する一方、生物多様性の創出や進化につながる点で重要である。本シンポジウムでは遺伝情報の維持と改変という二面性に焦点をあて、さまざまな DNA 修復の分子機構とその制御に関する最新の研究成果をもとにその生物学的意義について議論したい。

さらに広がるリン酸化シグナルの多様性

Expanding diversity of phospho-signaling

オーガナイザー：武田 弘資（長崎大学）

タンパク質リン酸化は、翻訳後修飾のプロトタイプとして古くからシグナル伝達研究における中心的な研究対象として注目されてきた。近年、リン酸化にとどまらず、きわめて多様な修飾によってタンパク質の機能が制御されていることが次々に明らかにされているが、決してリン酸化の重要性が下がった訳ではなく、むしろ他のタンパク質修飾との連携を取るためのリン酸化の新たな重要性が浮き彫りになってきている。そのような知見を踏まえて本シンポジウムでは、最新の研究から見えてくる、単なる ON-OFF スイッチとしての役割にとどまらないリン酸化シグナルの重要性と多様性について議論したい。

ノンコーディング RNA 「ネオ」 タクソノミ：分子機能の整理と予測

“Neo”-taxonomy of non-coding RNAs: classification and prediction of molecular functions

オーガナイザー：泊 幸秀（東京大学）

ノンコーディング RNA (ncRNA) が、遺伝子発現を緻密に制御することによって、様々な生命現象において重要な役割を果たしていることは、もはや周知の事実である。一方で、ncRNA は単に「タンパク質をコードしない RNA」として定義されただけの、極めて雑多な集団である。このように多様性に富んだ ncRNA 群の研究を加速させるためには、各 ncRNA 分子に隠された共通の特性（タンパク質のモチーフやドメインに相当する様なエレメント）を見つけ出して整理し、体系的に理解を進めることが重要である。本シンポジウムでは、そのようなエレメントを、小分子 RNA から高分子非コード RNA に至るまで様々な ncRNA から抽出して特徴付けする試みを紹介し、ncRNA 「ネオ」タクソノミの確立に向けた議論を深めたい。

基礎研究に立脚した神経系再生医療への展開

Development of regenerative medicine for nervous systems based on basic sciences

オーガナイザー：中島 欽一（九州大学）

iPS 細胞の登場によって、神経系も含めた多くの生命機能の再生医療が現実味を帯びてきた。失われた機能を再生させるためには、望みの細胞を作り出し、その移動を制御しつつ適切な場所に配置し、そこにもともと存在する細胞との機能的な連携を形成させるという、ある意味発生過程で行われる現象の一部を再現する必要がある。本シンポジウムでは、これらの細胞の挙動を基礎的観点から明らかにし、それを利用して再生医療へとつなげようとする試みから、実際に臨床治験が始められた、あるいは今まさに始められようとしているトピックスについて紹介したい。本シンポジウムが皆さんが神経系再生医療の今後の展開を考える一助となれば幸いである。

革新的自動化・AI 技術が切り開くライフサイエンスの未来

Robotics and AI: a new dimension of lab automation

オーガナイザー：夏目 徹（産業技術総合研究所）

ライフサイエンスとバイオインダストリーにおける個人研究生産性は低下する一方である。その端的な一例が、創薬にかかるコストと時間である。その真因は、研究者の技術や経験値が個人の暗黙知として囲い込まれているために、知識と技術が再利用・共有化出来ない事である。その結果、再現性を求め、延々と試行錯誤と堂々巡りを繰り返し、膨大な埋没コストを生むのである。この問題を解決し、ライフサイエンスに関わる全ての個人の生産性を向上する唯一のソリューションは、ベンチワークとデータ解析を自動化するロボット・AI 技術である。ロボット・AI 技術の最前線を一堂に会し、ライフサイエンスのあるべき姿を議論する。

ステムセルエイジング：老化の謎は解明できるか？

Stem Cell Aging: A Key to Understand Tissue/Organ Aging

オーガナイザー：西村 栄美（東京医科歯科大学）

超高齢社会において健康長寿を実現するためには生理的な老化のメカニズムを理解し、加齢関連疾患の発生源となる変化を正確に理解する必要がある。近年、多くの組織が幹細胞システムを構築していることが明らかになり、幹細胞あるいは幹細胞ニッチの加齢変化（ステムセルエイジング）が臓器の老化の鍵として、さらに加齢関連疾患の発症要因として注目を集めている。本シンポジウムでは、骨髄、消化器、皮膚、生殖器など様々な臓器を取り上げ、ステムセルエイジングを切り口に臓器の老化をどこまで理解しうるのか、老化の実体に迫る議論を展開する。

膜タンパク質の構造ダイナミクスと機能発現

Structural dynamics and function of membrane protein

オーガナイザー：濡木 理（東京大学）

ヒトゲノム解析の結果、ヒトの遺伝子は約22,000であり、その30%は膜タンパク質をコードしている。一方、創薬ターゲットの50%以上が膜タンパク質であり、膜タンパク質は基礎学術的に重要なみならず、医薬応用にとっても重要である。膜タンパク質には、精巧に基質を核を介して輸送するチャンネル・トランスポーター・ポンプと、膜を介して外部からのシグナルを伝達する膜受容体がある。両者とも、基質の輸送を厳密に制御することによって、あるいは外部の環境に細胞を適応させることによって、細胞内の環境を恒常的に保っている。したがって、膜タンパク質の分子機構を明らかにすることは、生命科学の最も重要な課題の一つである。本シンポジウムでは、膜タンパク質の動的な構造がどのようにしてその複雑な機能を生み出しているのかを明らかにする。

細胞老化随伴分泌現象（SASP）：古くて新しい細胞老化研究

Senescence-associated secretory phenotype（SASP）：old and new research on cellular senescence

オーガナイザー：原 英二（大阪大学）

私たちの身体を構成する細胞は、異常を感知すると増殖を停止する安全装置を備えている。細胞老化はこの安全装置の一つであり、細胞周期の進行を不可逆的に停止させることで発がんの危険性がある異常細胞の増殖を抑えるがん抑制機構として働いている。一方、最近の研究により細胞老化を起こした細胞（老化細胞）は炎症や発がんを促進する様々な分泌因子を高発現していることが明らかになってきた。この現象は SASP（Senescence-Associated Secretory Phenotype：細胞老化随伴分泌現象）と呼ばれ、細胞老化の副作用とも考えられている。では、そもそも、SASPは何故起こるのか？生体の恒常性を維持するために起こるはずの細胞老化がその正反対の作用を有する SASP を起こす理由は何処にあるのか？本シンポジウムでは、SASP 研究の第一線でご活躍の5人の研究者にお話しいただく。本シンポジウムを通して、細胞老化の役割と、その副作用が引き起こす疾患発症機構の理解に資することができれば何よりの幸甚である。

最先端の化学と生物学のミックス

Mixing Leading-edge Chemistry and Biology

オーガナイザー：東山 哲也（名古屋大学）

化学と生物学、これらは密接な関係にある学問でありながら、実は最先端で混じり合うのは容易ではない。最近、最先端の化学と生物学がミックスする試みが行われ始めた。その現場ではどのような研究が行われ、どのような成果が生まれているのだろうか。本シンポジウムでは、化学と生物学の異分野融合研究で活躍する「化学」分野の講演者を中心に、化学と生物学の真のミックスの威力について議論する。ふだん話を聞くチャンスが少ない、化学分野のスター研究者達が集結する、分子生物学会ならではの貴重な機会である。「分子」をキーワードに、化学と生物学がミックスすることで切り拓かれる新しい世界を楽しみたい。

幹細胞とがんの最前線

The cutting edge of stem cell & cancer research

オーガナイザー：平尾 敦（金沢大学）

幹細胞では、自己複製および分化プロセスが協調的に調節され、組織恒常性が支えられている。このような幹細胞制御システムは、微小環境変化に対しても柔軟に対応し、その恒常性の保持に寄与している。最近、幹細胞制御システムの破綻とがん化の関連について様々な観点から研究が進んでいる。また、がん組織における幹細胞特性（ステムネス）の獲得が、その悪性進展に深く関与していることも明らかになりつつある。本シンポジウムでは、幹細胞制御とがんを結ぶ分子機構に関して最新の研究成果を紹介していただき、議論したい。

染色体構築と機能

Chromosome architecture and function

オーガナイザー：深川 竜郎（大阪大学）

染色体は生命の設計図を担っており、その重要性については論を待たない。しかしながら、染色体自身がどのように構築され、細胞周期を通じてどうやってその構造をダイナミックに変化させ、機能を発現しているかについては、未知の点が多い。近年、染色体の機能ドメインを構成するタンパク質因子が数多く同定され、試験管内でそれらを作ることが可能となってきた。それらを再構成することで、各機能ドメインの構築原理や機能を理解することができる。本シンポジウムでは、この視点で染色体や染色体に関連する機能ドメインを理解することを目指した内外の研究者が最近のトピックスを発表し、染色体の機能・構築原理について議論する。

細胞競合が切り拓く新たな概念・領域

Cell competition - its implication in various physiological and pathological processes

オーガナイザー：藤田 恭之（北海道大学）

組織中で環境適応度の異なる細胞が混在すると、適応度のより高い細胞（勝者）はより低い細胞（敗者）を積極的に集団から排除する。「細胞競合」と呼ばれるこの現象は、種を超えて保存された細胞社会の適者生存システムと考えられ、ここ数年でその研究は大きく進展しつつある。本シンポジウムでは、細胞競合が制御する様々な生理的、病理的現象を紹介するとともに、細胞競合の分子基盤について議論する。

免疫寛容と恒常性

Immunological tolerance and homeostasis

オーガナイザー：堀 昌平（理化学研究所）

免疫系がどのようにして「自己」に対する寛容を獲得・維持するのかを理解することは、免疫学における中心的な課題です。従来、自己免疫寛容は自己反応性リンパ球の排除によるとされてきましたが、一方で、健常個体には自己免疫疾患を惹起する能力を持った自己反応性リンパ球が多数存在しており、それらは様々な内因的・外因的なメカニズムによって制御されていることが明らかになりました。さらに、これらのメカニズムは *microbiota* などある種の「非自己」に対する寛容にも関わり、生体の恒常性維持に必須の役割を担っています。このシンポジウムでは、近年研究の進捗が著しい免疫寛容と恒常性のメカニズムについて最先端の研究を展開されている方々をお招きして熱く議論したいと思います。

宿主-マイクロバイオータ相互作用

Host-microbiota interactions

オーガナイザー：本田 賢也（慶應義塾大学）

粘膜表面に定着する有益な微生物叢は「マイクロバイオータ」とよばれている。マイクロバイオータを構成する微生物は、協調的に小分子を産生し、宿主の生理機能に大きな影響を与えている。マイクロバイオータの微生物構成異常は「ディスバイオーシス」とばれ、炎症性疾患、アレルギー、代謝疾患、自閉症、がんなど様々な疾患の病因になることが知られている。ディスバイオーシスは慢性炎症の持続を助長することが動物モデルにおいて示されている。従ってマイクロバイオータの人為的操作は、複数の疾患において有望な治療戦略の一つとなっている。本シンポジウムでは、疾患に関連する宿主-マイクロバイオータ相互作用について討論する。

ゲノム解析が解き明かすがんの治療標的

Therapeutic targets of cancer deciphered through genome analyses

オーガナイザー：間野 博行（東京大学）

次世代シーケンサーの登場により、がんの発生・進展に関わるゲノム・エピゲノム異常の解明は急速に進んだ。タンパクコード遺伝子の体細胞変異の網羅的解析によるドライバーがん遺伝子の同定とそれに基づく診断法・分子標的療法の開発のみならず、がんのメタボローム異常、*clonal heterogeneity*、がんの進展過程の理解など、ゲノム研究の成果は多岐にわたっている。本シンポジウムでは最新のがんゲノム解析がどのような理解を我々にもたらし、がん医療を変革しつつあるかを議論したい。

ゲノム編集技術の進展と様々な分野での利用

Advances in genome editing technology and its application in various fields

オーガナイザー：山本 卓（広島大学）

ゲノム編集技術は、2012年のCRISPR-Cas9の開発によって誰もが使える技術となり、現在、生命科学の様々な分野での利用が急速に進んでいる。本シンポジウムでは、ゲノム編集ツールの開発、ゲノム編集を用いた遺伝子改変技術の開発、様々な生物（微生物から動植物）での遺伝子改変の研究および応用を目指したゲノム編集の現状について紹介し、基礎から応用にわたるゲノム編集研究の今後の展開について議論する。

◆公募シンポジウム（最大 80 テーマ）

会員より企画を公募します。後述の募集要項をご参照の上、奮ってご応募ください（本年会のプログラムはすべてシンポジウムとして開催し、ワークショップの公募はありません）。

◆一般演題（シンポジウム・ポスター）

公募シンポジウムでは一般演題から1～2演題程度を採択します。また、ポスターセッションにはポスター座長制を導入します。演題投稿期間は7月1日(金)から7月29日(金)となります。詳細は6月発行の次回会報、および年会ホームページにてご案内いたします。多数の演題投稿をお待ちしております。

◆バイオテクノロジーセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆市民公開講座

12月2日(金)の夕方に、「生命倫理」をテーマとする市民公開講座を開催予定です。

◆その他の企画

その他の企画は詳細が決まり次第、年会ホームページにてご案内いたします。

【シンポジウムの企画公募について（3月22日(火)受付締切）】

本年会では、シンポジウムの企画を会員の皆さまより公募いたします。ご提出いただいた企画案は、プログラム委員会において厳正なる審査を行い、採否を決定します。採否結果は4月中旬頃に応募者へご連絡いたします。下記要項をご確認のうえ、奮ってご応募ください。

※本年会の企画はすべてシンポジウムとして開催し、ワークショップ企画の公募はいたしませんので、ご注意ください。

◆募集要項

- ・1テーマあたり135分の時間枠で、最大80テーマを採択します。
- ・135分内の演題数は自由ですが、一般演題から1～2演題程度の採択をお願いいたします。
- ・講演言語はオーガナイザーに一任いたします。但し、英語しか理解できない外国人スピーカーのいるセッションでは発表は全て英語でお願いします。一方、質疑応答は英語でも日本語でも可とすることを推奨いたします。
- ・発表スライドは発表言語に関わらず、全演者に英語での作成をお願いします。但し、各スライドのタイトル部分や特殊な技術用語については可能な限り日本語併記をご推奨下さい。
- ・オーガナイザーは1名または2名とし、両名とも日本分子生物学会の会員に限ります。
- ・女性からの企画応募、および演者への女性の起用を推奨いたします。
- ・新学術領域研究などとの共催も歓迎します。
- ・海外演者を招聘する場合には、年会から旅費（人数に関わらず1企画につき15万円）・宿泊費（年会指定のホテルでの最大3泊分）を支給いたします。
- ・国内演者の旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。
- ・海外・国内を問わず、非会員指定演者の参加費は免除させていただきます。

◆応募要領

下記事項を明記の上、3月22日(火)までに年会事務局宛、E-mail (mbsj2016@aeplan.co.jp)にてご提出ください。

- 1) テーマタイトル (和文・英文)
- 2) オーガナイザーの氏名、所属 (和文・英文)、連絡先
- 3) 概要 (和文・英文／和文全角 200 文字程度・英文半角 400 文字程度)
- 4) 予定する指定演者の氏名・所属 (応募時には演者による講演承諾は不要です)
- 5) 2つまでの大項目-小項目の組み合わせ (以下の表参照)、および3つのキーワード (自由)
- 6) 予定する講演言語 (日本語・英語・演者が選択)
- 7) 予想される聴衆数
- 8) 新学術領域研究などとの共催の有無：有／無／未定

大項目		小項目	
1	分子構造・生命情報	a	ゲノム・遺伝子・核酸
		b	タンパク質
		c	糖・脂質・代謝産物
		d	オミクス
		e	分子進化
		f	その他
2	分子・複合体の機能	a	DNA複製
		b	組換え・変異・修復
		c	エピジェネティックス
		d	転写
		e	RNA・RNP
		f	翻訳
		g	その他
3	細胞の構造と機能	a	染色体・核内構造体
		b	細胞質オルガネラ
		c	細胞接着・細胞運動・細胞外基質
		d	タンパク質プロセッシング・輸送・局在化
		e	生体膜・細胞骨格
		f	細胞増殖・分裂・周期
		g	シグナル伝達 (翻訳後修飾)
		h	シグナル伝達 (生理活性物質)
		i	細胞死
		j	その他
4	発生・再生	a	初期発生
		b	器官・形態形成・再生
		c	幹細胞
		d	細胞分化
		e	生殖
		f	神経発生
		g	その他

大項目		小項目	
5	高次生命現象・疾患	a	脳・神経系
		b	免疫
		c	感染
		d	老化
		e	がん細胞
		f	がん組織
		g	がん治療
		h	代謝
		i	遺伝性疾患
		j	植物
		k	その他
6	方法論・技術	a	核酸工学・ゲノム編集
		b	タンパク質工学
		c	細胞工学・発生工学
		d	ケミカルバイオロジー
		e	病因解析・診断
		f	バイオインフォマティクス
		g	イメージング
		h	ラボオートメーション・ロボティクス
		i	その他
7	その他	a	その他

◆企画提出およびお問合せ先

第 39 回日本分子生物学会年会事務局 (株)エー・イー企画 内)

〒 101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 岩波書店一ツ橋別館 4 階

Tel : 03-3230-2744 Fax : 03-3230-2479 E-mail : mbsj2016@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
11月30日(水)	プレナリー モーニング セミナー 8:00-8:45	シンポジウム 9:00-11:15			バイテク セミナー 11:55-12:45 学会企画 11:30-12:45	シンポジウム 13:00-15:15					自由 討論 15:30-16:15	発表 討論 16:15-17:30	自由 討論 17:30-18:00	撤去
	貼付													
	機器・試薬・書籍展示 10:00-18:00													
12月1日(木)	プレナリー モーニング セミナー 8:00-8:45	シンポジウム 9:00-11:15			バイテク セミナー 11:55-12:45 学会企画 11:30-12:45	シンポジウム 13:00-15:15					自由 討論 15:30-16:15	発表 討論 16:15-17:30	自由 討論 17:30-18:00	撤去
	貼付													
	機器・試薬・書籍展示 10:00-18:00													
12月2日(金)	プレナリー モーニング セミナー 8:00-8:45	シンポジウム 9:00-11:15			バイテク セミナー 11:55-12:45 総会・高澤 基金贈呈式 11:30-12:45	シンポジウム 13:00-15:15					自由 討論 15:30-16:15	発表 討論 16:15-17:30	自由 討論 17:30-18:00	撤去
	貼付													
	機器・試薬・書籍展示 10:00-18:00													
													市民公開 講座 18:15-20:15 (仮)	

※あくまで2016年1月時点での予定であり、今後変更される場合があります。

第 38 回日本分子生物学会年会 (BMB2015) 開催報告

第 38 回日本分子生物学会年会は、5 年ぶりに日本生化学会大会との合同大会 (BMB2015) として、師走の神戸ポートアイランドにて開催いたしました。皆様のおかげをもちまして、10,130 名の参加者をお迎えし、一般演題数 4,443 題、シンポジウム・ワークショップなどの演題数は 1,000 題を超える発表が行われ、盛会のうちに終了することができました。

合同大会を開催するにあたりましては、わが国の生命科学を代表する二つの大きな学会が合同で開催することの意義を考慮し、BMB だからこそできる企画や構成といったことについて、第 88 回日本生化学会大会の遠藤斗志也会頭をはじめ、幹事会メンバーと議論を重ねました。特に、両学会とも会員数の減少とともに大会参加者数が減少傾向にある中で、大会を盛り上げ交流を活性化するため如何に参加者数を増やすか、その方策を議論しました。幸い、会員から公募したワークショップには予想をはるかに上回る数の応募があり、このような両学会員からの熱い期待に応えるべく予算をやりくりして会場数を大幅に増やし、できるだけ多くの企画を採択しました。また、一般口頭発表も予想をはるかに超える多くの応募をいただき、4 日目のお昼時に全会場を使って昼食を配布して開催することで、多くの一般口頭発表数を確保しました。そのため同じ分野の発表を複数の会場で同時進行する、あるいは口頭発表とポスター発表の日が異なるといった不都合が生じましたが、口頭発表枠を増やした結果ですのご容赦ください。また、プレナリーレクチャー、バイオニアズレクチャー、プログラム委員の企画によるシンポジウム、若手の方々の関心も大きい創業シンポジウム、ランチョンセミナー、フォーラム、次世代の育成を目指した高校生研究発表など、いずれも大変盛況でした。会場によっては参加者があふれたため、急遽、会場の外にモニターを設置して中継せざるをえないほどでした。その他には、合同大会の企画としての「研究倫理フォーラム」と 2 年ぶりに帰ってきた「ガチ議論」は、夜の時間帯の開催にもかかわらず、多くの方にご参加いただきました。最終日の夕方に開催した市民公開講座「生命科学を楽しもう」では、大会参加者のみならず

一般市民の方々にも多数ご参加いただき、魅力的なプレゼンに加えてユニークな討論が大変好評でした。本大会は久しぶりに参加者総数が 10,000 名を超え、BMB ならではの熱気を感じることができたのではないかと思います。本大会を一つのきっかけとして、ぜひ今後の大会の在り方を考えていただければと思います。

新たな試みの一つとして、企業の要望に答えるべくランチョンセミナーの事前予約制を実施いたしました。しかしながら、受付開始と同時に想定を超える非常に多くのアクセスが集中し、事前のお申込みをご予定いただきました皆様方には大変ご迷惑をおかけいたしました。次回には、改善できればと思います。大会の収入の多くは企業からの協賛収入 (ランチョンセミナー・展示・広告等) で占められておりますが、企業を取り巻く景気の状態は依然厳しいものがあるようです。そんな中でも、ランチョンセミナー、展示、広告にご協賛いただきました多くの企業の皆様、合同大会の趣旨にご賛同いただきご支援いただきました日本製薬団体連合会様、神戸市様、中内力コンベンション振興財団様には心から御礼を申し上げます。ただ、年々企業共催のランチョンセミナーや企業展示のコマ数が減ってきており、将来的には参加費の値上げも考えざるをえないのではないかと思います。

合同大会にご参加いただいた皆様には、知的なお祭りや異分野交流としてのワクワク感を感じていただけましたでしょうか。少しでも感じとっていただけたのであれば、これに勝る喜びはございません。最後になりましたが、合同大会の企画・運営にご協力いただきました幹事会メンバー、プログラム委員、オーガナイザー、一般口演座長、講演者の皆様、ご参加いただきました皆様、また、両学会事務局ならびに BMB 事務局 (AE 企画様)、臨機応変に対応していただいた学会会場の多くのスタッフの方々に厚く御礼申し上げます。

2016 年 2 月

第 38 回日本分子生物学会年会 (BMB2015)

年会長 影山龍一郎

キャリアパス委員会 年会企画報告

―若手研究者を取り巻く諸問題―

BMB2015では例年通り2つのランチョンセミナーの企画を立てました。ケータイゴングによる双方向会議システムを使用し、両企画とも大盛況でした。

1つは大会初日に日本生化学会男女共同参画推進委員会との共同企画で「研究者のライフイベントを考える―目指すべき制度改正と環境改善―」というテーマで行い、ゲストには日本学術振興会の清水美和さんに来ていただきました。事前アンケートで実際に研究活動との両立で障害となっているライフイベントを調査して、その中から公開で議論することで前進できそうなトピックスを選びました。中でも学振研究員の雇用問題は、ただでも不足している保育園にますます入りにくくなるなど、研究者固有の制度の問題であり、今回集中して議論しました。根本的解決とまでは至りませんでした。情報と問題点の共有はでき、これをきっかけに改善の方向に進んでいくものと期待しています。保育園不足の問題は、本来行政が最優先事項として進めていくべきです。個人的な意見としては、政府が本気で「少子化」問題を解決しようとしているのなら、保育園などは供給過剰なくらいがちょうどいいと思います。

アンケートではそれ以外にも、職場での人間関係（ボスの無理解、ハラスメント）、改善してもらいたいラボルール（長時間労働、夜間・土曜日の会議）、子育て全般、介護、遠距離夫婦など、たくさんのご意見をいただきました。これらの多くはどの社会にでも存在する問題です。我々研究者社会が先頭を切って解決の「モデルケース」を示せばいいですね。

もう1つの企画は、「本当のPIになるために」というテーマで大会二日目に行い、ゲストには大阪大学の仲野徹会員に来ていただきました。事前アンケートの結果、多くの若手研究者は将来PIになりたいと思っていることが確認されました。ポストドク問題など若手を取り巻く空気は重たいのですが、皆さん、やる気満々だということを知ってホッとしました。同時に若手研究者が希望をもって研究に取り組めるような研究者社会を早急に構築する必要があると再認識した次第です。

15年前には「PI」も「ポストドク」も日本にはほとんど存在しなかったワードです。ともにアメリカからの輸入ものです。「PI」と「ポストドク」は対になる言葉で、「ポストドク」あつての「PI」であり、「ポストドク」の次のポジションが「PI」です。つまり厳密に言えば、「ポストドク」のいない研究室の「ボス」は「大学教員」であつて本来の意味でのPIではおそらくありません。また事前アンケー

ト結果でもありましたが、日本の「ポストドク」の次の希望ポジションとして一番多かったのは「助教等の任期なしの非PI」でした。やはりこのことから日本のポストドクは本来の意味での「ポストドク」ではなく「任期付き短期雇用研究員」が正しい表現かもしれません。「任期付き」しかも「短期雇用」となると、その人数をあまり増やしてはいけないと直感的に思うのですが、「ポストドク」、「PI」というその言葉の心地よさに少し誤解があつたのかもしれません。

名称はともかくとして、生命系の現実問題としてポストドクが次に進むポジション数が絶対的に不足しています。どうすればいいのでしょうか？まず原点に戻って日本の制度にマッチした制度に変えるべきです。ポストドク制度はどちらかという研究優先で、人材育成という観点が不足しています。現在のようにたくさん雇つてほんの一部しかアカデミックに残れないようなのは、やはり日本向きではないですね。もっと大切に育てるべきです。そういった意味も含めて、私は来年度から始まる「卓越研究員制度」に期待しています（特に関係者ではありません）。この制度は、まだ今から始まるので未成熟だと思いますが、今後終身雇用につながるいい制度になる可能性があると思います。これから意見を出し合つて、我が国、そして生命系の研究者社会にも適合した制度に育てていくことが、1つの活路に繋がると考えています。

キャリアパス委員会
委員長 小林 武彦

【研究者のライフイベントを考える

―目指すべき制度改正と環境改善―

BMB2015 両学会共同企画ランチョンセミナー

- 日 時：2015年12月1日(火) 12:40～13:45
- 会 場：神戸国際会議場3階 国際会議室(第15会場)
- 講 演：清水 美和（日本学術振興会人材育成事業部 研究者養成課 課長代理）

今回のランチョンセミナーでは、男女共同参画に関わるトピックを検討するため、男性も直面するライフイベントにおける困っている点、あるいは困った点について事前にアンケートを実施しました（回答者数計314件）。その中で最も多く指摘された点は、日本学術振興会特別研究員の福利厚生に関するものでした。

そこで本企画では、日本学術振興会人材育成事業部研究者養成課の清水美和氏をお招きし、日本の男女共同参画の歴史についての概略と、特別研究員の制度についてご講演いただきました。その後、清水氏にもパネリスト

としてご参加いただき、本ランチョンセミナーを企画した生化学会男女共同参画推進委員会、分子生物学会キャリアパス委員会の委員とともに、事前アンケートで多く指摘された点について、ケータイゴングを用いて会場からのコメントを収集しながら双方向パネルディスカッションを行いました。会場参加者は約 350 名でした。

企画側からディスカッションポイントとして挙げた点は、

1. 学術振興会特別研究員の福利厚生
 2. 単身赴任
 3. ステップアップとライフイベント（特に子育て）の時期の重なり
 4. ポジティブアクションの効果
 5. 研究室行事の開催時間
- の5つでした。

ディスカッションの進行で、提示した点からやや逸れてしまうこともありましたが、提示した点の解決には、

情報共有の強化、研究者からの建設的な提案、男女双方の意識改革が必要である理解が得られたと感じています。また、最初の清水氏の講演において、男女共同参画がどのように進んできたかをあらためて振り返り、また新たに学んでいただけたと思います。詳細については、ぜひ全文記録をお読みください。

男女共同参画は、まだまだ解決されるべき点があります。私は、この活動に8年ほど関与してきましたが、現在、この活動は、男女どちらかだけの問題でなく双方が協働して行われるべきものであること、キャリアパスと密接な関係があることが認識されつつあると感じています。

アンケートのご回答は、今後のキャリアパス委員会の活動に活用させていただきます。また、今後とも、本委員会の活動にご協力いただくと共に、新たなご提案があれば積極的に寄せいただきたく、お願い申し上げます。

（文責：座長・井関 祥子）

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】 あなたの年齢は？

① 24 歳以下	66	28.6%
② 25 ～ 29 歳	46	19.9%
③ 30 ～ 34 歳	25	10.8%
④ 35 ～ 39 歳	20	8.7%
⑤ 40 ～ 49 歳	49	21.2%
⑥ 50 ～ 59 歳	18	7.8%
⑦ 60 歳以上	6	2.6%
※ 未記入	1	0.4%
計	231	100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	18	7.8%
② 大学院生（修士）	52	22.5%
③ 大学院生（博士）	33	14.3%
④ ポスドク	17	7.4%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	57	24.7%
⑥ 大学教員（教授）	17	7.4%
⑦ 研究員	11	4.8%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	12	5.2%
⑨ 企業	10	4.3%
⑩ その他（グランドフェロー・テクニシャン・URA・海外ラボにポスドクアプライ中）	4	1.7%
計	231	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	74	26.9%
② 大会ホームページ	87	31.6%
③ 会報	8	2.9%
④ プログラム集	68	24.7%
⑤ ポスター	5	1.8%
⑥ 会場内の広告	15	5.5%
⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	15	5.5%
⑨ その他（ランチョンセミナー事前予約）	1	0.4%
⑩ その他（人の流れ）	1	0.4%
⑪ その他（学会からのメール）	1	0.4%
計	275	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	225	97.4%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	2	0.9%
※ 未記入	4	1.7%
計	231	100.0%

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	76	32.9%
② まあまあ面白かった	101	43.7%
③ 普通	45	19.5%
④ あまり面白くなかった	3	1.3%
⑤ つまらなかった	1	0.4%
※ 未記入	5	2.2%
計	231	100.0%

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	71	30.7%
② まあまあ面白かった	98	42.4%
③ 普通	28	12.1%
④ あまり面白くなかった	11	4.8%
⑤ つまらなかった	2	0.9%
※ 未記入	21	9.1%
計	231	100.0%

【問7】 今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	183	79.2%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	29	12.6%
③ やめた方がよい	3	1.3%
④ わからない	4	1.7%
※ 未記入	12	5.2%
計	231	100.0%

【問8】このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・前半のお話が歴史もあり面白かった。
- ・学振について勉強になった。
- ・学振について知る機会が少ないためいい機会になった。
- ・正直これまで学振にかかる問題点を知らなかったので勉強になった。
- ・女性研究者の立場や学振の問題点を積極的に議論できる場があることは非常に良いことだと思う。
- ・学振の制度自体がまだ理解されていないことが改めて認識できた。研究者を守るための大事な組織であることを、皆が認識すべきなのだと感じた。
- ・学振と研究機関の連携はまだ改善できると思う。
- ・学振側に研究機関側で学振特別研究員の捉え方にギャップがあると感じた。
- ・予想以上に制度を決める側も使う側も迷っていると感じた。
- ・学振というDC 研究者や科研費のイメージが強かったため、RPD や雇用形態をとらないといった細かいシステムも分かり勉強になった。一般的な職と異なる部分も多いが、ライフイベントとの両立の重要性を知った。ポストの少なさと任期の短さの改善をする必要があると感じた。
- ・学振のサポートについて。そのサポートは具体的に十年後の研究員をどのような雇用の研究者にすることを目指しているのか？何%を大学の職員にするとか？
- ・学振で採用する期間をほぼパーマネントにするなど、国が「研究者」を採用する機関をつくれれば保育所や研究者夫婦の問題も減ると思う。
- ・学振について：特別研究員は「主体的に研究できる制度」とのことだが、実際にはラボの仕事（テーマ）をして、上司はポスト1人タダで使えてうれしいというような認識も多いのでは？そうすると機関雇用のポストと比べて福利厚生が受けられずかわいそう。
- ・学振の制度問題に話題が多少集中して、うわずまった議論が続いていたのが気になった。学振の諸制度はすばらしいが、それを受けられるのはごく一部の人達である。その制度の議論は他ですべき。
- ・面白かったが、学振制度の話題に偏りすぎの印象だった。
- ・学振の支援を受けるのにも一定のハードルがあって、さらに次のポストが保証されているわけではないので、学生の立場からするとライフイベントや男女の別関係なく、研究に従事すること自体に希望を持ってない現状があるかなと思う。
- ・研究者着任のための制度というより、ポストに着任するまでの「つなぎ」としての面が強いと思う。
- ・前半の「学振」については論点がいまいち分からなかった。保育所の件は学振の事務で対応すれば良いだけの話ということ？そもそも学振に採択されて給料をもらいながら研究できるのは相当恵まれた人だと思う。学振にもれてしまった人、女性のテクニシャンなどの方が問題は深刻なのでは？また学振にも任期があるが、任期が終わった後のサポートは？
- ・RPD 採択率26%はほとんどギャンブル。育休後に復活できる可能性が低いのに子供を作る選択はできない。育休（出産）＝無職のリスクが高い。研究者であり続けるためにテニユアのポジションが取れないと出産は選べない。RPDを増やすより、女性のテニユアポジションを増加させる方が成果が上がるはず。
- ・年齢や業績にばかりとらわれない採択を行ってほしいと感じた。今日のセミナーを聞いていくらシステムがあっても「知られていない、伝わっていない」ということである。ポストク一人計画と共にポストもその分増やすべきである。
- ・最初の方、学振ポストクの話に特化していたような気がする。一般的なポストクの話も入れてほしい。
- ・学振の雇用問題を解決するためには学振が考え方を変えなければならない。「学振雇用できない」の一点張りではなく、柔軟な姿勢を見せて学振が変わる努力をしないといけないと思う。
- ・学振の制度を変えるのは難しいと思った。
- ・学振の限界、様々な研究者の意見を知ることができ有意義だった。
- ・海外PDの申請期間、制限をなくしてほしい。
- ・子育てについては国の問題もあると思う。
- ・始めに現在の制度の中で、ということをもっと強調した方が質問やディスカッションの中で制度の質問が出なかったと思う。
- ・女性活躍機会の創出などの議論を期待していたが（ライフイベントがらみ）学振の制度とその説明に終始していたのは残念だった。
- ・私も女性なので、前半の女性研究者が虐げられてきた歴史を見て心が痛くなった。日頃も女性であることによって研究に不安を感じることも多い。
- ・将来結婚したら別居婚になるのは当たり前だと思っていたので、一緒に働いている人がいるのは知らなかった。
- ・夫婦で同じラボで働くというディスカッションが興味深かった。
- ・クロスアポイントメントがあまり盛り上がりず残念であった。
- ・後半の「ライフイベント」では出産・育児の話だったが、その前に若手研究者の雇用ではないだろうか？任期付の不安定な雇用では出産も育児もままならない。
- ・国内での研究職、大学職員数、学生数の予測などデータに基づいた話も必要ではないか。ポストがないのであふれるのは当然。
- ・研究者を雇用する予算というものが少ないのが問題では？
- ・研究者の給料が安いことが根本、要するにお金がないことが問題。それを避ける議論はおかしい。
- ・DC、PCの給与を減らしてもっと安く広く採用すればよいのではないか。若いDC、PDにこんなに給与とれない。（結婚している人には増額）
- ・企業サイドが採用する際の考えは？女子の博士学生を取りたくないとか？
- ・正規雇用枠を増やすべき。
- ・ライフイベントはラボのPIの考え方や態度に依存する。PIレベルの方の話を知りたい。
- ・ミーティングの話もそうだが、時間に対してのコスパを考えるべき。長く残るのが良いわけではない。
- ・私は34歳で結婚、39歳で出産、ライフイベントが遅れたのはポジションが維持できないため研究を中断できなかった。高齢で子育てするのは体力的に大変である。研究の時間も短くなっている。
- ・中川先生の「育児は一生続く。9時～5時で仕事をすれば文句を言うな」という意見に賛成である。でもそういうPIは少ないと思う。
- ・PM5:00以降にミーティングのあるラボの方が多く、ギャップを感じた。
- ・学生の間は土曜にミーティングがあっても大丈夫だったが、確かに社会人として大変だろう。
- ・「24時間働けますか」のフレーズが象徴するように男性が働きすぎてその埋め合わせをパートナー（女性）に負担を強いている気がする。男性について行こうと思うと子供を産めない。研究が続けられない。「9時～5時」を徹底すべき。このように意識を変えるにはどうしたらよいか？

- ・女性が研究を続けるには男性(父親)がどれだけ育児に関われるかが重要である。どうしても女性(母親)の負担が大きいため。
- ・女性がライフイベントに左右されずに研究現場に受け入れられる環境づくり、意識が高まってほしいと思った。
- ・リーダーシップ研修など上司としての基礎能力は、研究能力とは別なのでそれを底上げすれば女性研究者の地位も上がると思う。
- ・女性を差別するような体制、風潮は大学にも学会にもない。ほかの理由(物理的に不可能)なために子育て研究者(男も女も)がうまくやっていけない社会体制がある。
- ・育短、育休、産休制度など厚生や支援や企業ではかなり進んでいる。優秀な女性が起業への就職を考えてくださるとうれしく思う。
- ・女性だけの問題だけではなく、ポストドクのシステムなども影響しているので難しい問題である。
- ・制度や風習は中々変えられない。まず本人が性別や年齢を気にせずやりたいことをやっていたいと思う気持ちが大切であると思う。そういう気持ちをもってやっていきます。
- ・小生(69歳)、妻(67歳)ポストドクから米国で13年、妻はaffirmative actionでassistant professorになり、出産後二週間目から働いていた。子供は5か月から保育園、上は10歳まで下は5歳まで米国育ち。夫妻とも一応帰国後教授になった。難しい日本ではなく、よりやりやすい所に行く発想が大切。
- ・男女の能力の差より家庭との両立に不安を抱く人が多い。より安定した制度の施策、意識改革が必要だと感じた。
- ・男女の雇用問題はもう良いのでは？
- ・「女性の数が少ないから女性の数を増やす」という単純な構造に疑問がある。純粋に能力による基準で判断し、その上で女性の数が増えればよいのではないかと思う。
- ・いつも同じ問題で新しさが少ない。今の女性研究者のサポートはいわゆる「ゆとり教育」と同じで、数年後には無能な使えない女性研究者が増えて下の世代への不信につながると思う。“男女平等”を貫くことが大切。夫婦一緒に雇用というのは制度として成立させてはいけない。不平等である。あくまで平等に選考して結果そうならいけばOK。
- ・「男女共同参画」というテーマで行われるシンポジウムは大抵の場合、女性問題に限られている印象を受ける。現実として女性の位置が男性より低められているのは分かるが「男女」という冠に違和感を抱く。
- ・女性教員30%など、目標をかかげているところも多い。その目標達成のためには、これからの採用はすべて女性になるという矛盾。
- ・「資生堂ショック」にあるように、企業では女性優遇から男女平等に移行する流れもある。このような事例についても研究者側は受け止めるべき。研究者は企業の追随をせず、新しい制度を作り出すだけの気構えが必要では？
- ・育休や出産に伴う男性職員の休暇がポストドクのような契約職員は正職員ほど厚いサポートがなく、無給だったり数が少なかったりする。
- ・ボトムアップと言われても、本当に声を上げたい人はその研究者コミュニティにも属していない(属することができない)のではないか。
- ・学生にとって、後半のディスカッションはすごくイメージが持ちづらいテーマだったと思う。一方、我々学生は後々のより良い研究生活のために学ばなければならないテーマだと思う。
- ・修士の人間には難しい。
- ・分からない単語も多く、少し自分には早かった。
- ・たいてい意識も制度も変わらない。
- ・研究者に限った問題ではない話が少し多かった。
- ・男性、女性、若手、年寄の色々な立場の人がもう少し柔軟になるべき。
- ・もっと活躍した女性の紹介を望む。
- ・今後さらに女性の活躍を期待したい。
- ・問題提起はよいのだがどうすれば良いかがあまりはっきりしなかった。
- ・提示された問題点をまとめてフォローアップができれば望ましい。
- ・こういう議論からどのくらいの現状打破がなされていくか、とても興味がある。
- ・ライフイベントというなら家の購入など、もっと他のことも取り上げてほしい。
- ・パートナーが研究以外の専門職の場合も上げてほしい。
- ・テーマ1、2、～5くらいまでであったらしいが、手元のどの資料にも今何の話を書きか記載がない。
- ・昔から比べると今は恵まれた環境なのだと分かった。
- ・女性研究者の現状が分かってよかった。
- ・男性には退屈だったかも。私は女性なので若い大学院生にアドバイスできる情報が多かった。
- ・多くの男性の参加に少し希望ももてた。
- ・みんな悩んでいる or 悩んでいたと知って、自分一人ではないと感じた。
- ・学生という身分上、このような話を聞く機会は貴重でした。
- ・まだ学部生なのでその道に進むかも考えていないが、将来を考える材料としては聞いておくと便利なのかなと思った。
- ・現在、学生で今後のビジョンを考えるための良いランチオンセミナーだった。研究者支援の現状を知ることができてとてもよかった。
- ・現状における研究ライフの問題点を知ることができ、大変充実した時間を過ごすことができた。
- ・仕事、研究以外のことをどうしていくか考えるきっかけになった。
- ・今後ライフイベントを考える上でどのようなことが問題になってくるかという生の声を聴けてよかった。
- ・知らないキーワードも飛び出して勉強になった。
- ・他のラボ事情(ミーティング)などが聞けて良かったです。
- ・これまで知らないことが分かった。
- ・今後の参考になるようなお話がいろいろと聞けた。
- ・有益な情報が聞けて参考になった。
- ・現在の研究者が抱える問題の一端を知ることができた。
- ・知らないことが多くて参考になった。
- ・自分のキャリアを考える良い機会となった。
- ・いろいろな意見が聞けて良かった。
- ・中身のいっばいつまった意義のあるセミナーだった。
- ・今後のためにも続けていくべき。
- ・このようなセッションの継続を望む。

- ・各機関で考えるべきという結論が多かったように思うが、それぞれがというよりは機関同士が共同で考えていく必要があると思った。
- ・社会の制度の問題が Discuss の中心となっていたが、みな頭が固いと思う。パネリストは現状の社会制度を肯定しているのでは？
- ・散漫すぎる、パネリストは不勉強では？もっと問題を絞り、きちんと解決法を提案する方向で議論してほしい。
- ・もっと研究を出しやすいシステムに変革する志向を強くもってほしい。皆あまりにも保守的である。
- ・意見が研究者視点に偏っている気がする。研究機関や企業の意見も欲しい。
- ・議論というより質疑応答みたいになっているような。
- ・誰がセミナーでお話になるかが重要だと思う。(柳田先生が登壇されるので参加した)
- ・DCの話が全くない (PDばかり)。
- ・議論すべきテーマの数が多いためか、各々の discussion が浅い印象をもった。
- ・もう少し深い議論があってもいい。盛りだくさんであった。
- ・後半、事例アンケート+ある程度の結論を出しておいて、さらに意見交換できると良いのでは。多少フォーカスしきれなかったところがあると思う。
- ・デュアルディスカッション形式が興味深くてランチョンセミナーを受けたが、男女参画社会の実現に深い興味を持つに至った。
- ・参加型というのが良かった。
- ・参加型にしたのはよいと思った。
- ・参加型になっていて面白かった。
- ・参加型なので聞くだけでないところも良かった。
- ・携帯での聴衆参加は面白い試みだった。
- ・アプリでコメントをすぐに反映できるシステムが良かった。
- ・ディスカッション形式であるのは良かった。
- ・コメント投稿が面白い。
- ・意見のくみ上げは面白かった。
- ・会場にいる方達の意見もすぐわかる形式になっていたのが良かった。
- ・コメントをリアルタイムで見られるシステムが面白かった。
- ・コメントがスライドに反映されて議論するのは新鮮だった。
- ・会場の意見がリアルタイムで分かるのは非常に良かったと思う。
- ・会場から匿名で意見ができるのは良かった。
- ・ネット経由で意見を述べられるのは発言しやすく、時間の節約にもなるので良いと思った。
- ・オーディエンスが参加できて、そのコメントをひろって議論してくれるのは聞きたい話が聞けるので良いと思う。
- ・パネリストと聴衆のディスカッションをリアルタイムでやれることはいいことだと思った。
- ・普通は会場からの質問がやりにくいので、ケータイを使った双方向パネルディスカッションはタイムリーに質問に答えていただけてよかった。
- ・前回参加した時よりも会場からのコメントを拾ってもらえたので良かった。
- ・予想より聴衆はあまり参加できなかった。
- ・コメントを取り上げる回数が少ないのが残念だった。
- ・100人以上集まっても意見は60コというのは意見を出しにくいのかな？
- ・会場からの意見が少なかった。PCからも送れるようにすべき (スマホをもっていない)。
- ・意見は口頭で表す方法も併用した方が良いのでは？タブレットでは文章を打つのに時間がかかる。
- ・できればインターネットがフリーで接続できれば iPad からアクセスできてよかったと思います。
- ・スマホを持っていないので意見を述べにくい。
- ・このような企画を行う部屋だけでもよいので、wifi 環境を一時的に整えてほしい。
- ・意見が欲しいなら会場に wifi くらい準備してほしい。
- ・free wifi か無線 LAN が欲しかった。
- ・ネット接続する企画であればルータを設置すべき。
- ・free wifi が使用できない環境のため、アンケートに参加できず質問もできなかった。
- ・手元のアプリ画面でもコメント一覧が見えるとうい。
- ・手元 (携帯) でも他の人の投稿が見られるといい。
- ・ディスカッションに参加するサイトの URL をどこかに書いておいてほしい。
- ・照明の関係かスクリーンが見にくかった。
- ・時間が短いように思った。
- ・もっと時間がほしい。
- ・もっと時間が長くとってほしかった。
- ・勉強になった。
- ・有益だった。
- ・大変面白かった。
- ・とても有意義であった。
- ・非常に興味深い内容であった。
- ・知らなかったことばかりで勉強になった。

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあればお教えてください。

- ・博士号取得後の就職環境について (女性研究者)
- ・(過去と比較して) 女性研究者の参加率
- ・女性のキャリアパス～PIまで。～academic 以外に。
- ・欧米の若手女性研究者のセミナー
- ・女性研究者の階級問題

- ・夫妻研究者について
- ・同様のテーマ、内容が変わらなくてもこのことについては長く取り上げていくべき
- ・同じテーマで女性研究者の問題を男性に知ってほしい。
- ・テーマはこれでよい。
- ・ライフイベントとの両立の成功例
- ・ワークライフバランスに関するテーマ
- ・パートナー探し
- ・親の介護問題（子育てだけでなく）
- ・ここ数年での研究環境の改善
- ・研究環境の比較（日米、欧州）
- ・仕事時間の話
- ・オーバーワーク、休暇所得について
- ・産休、育休研究者への助成・支援策
- ・男女で育児の負担の大きさに差があることについて
- ・学生の意見を聞きたい。（学生は女性が多いが、就職でかなり減少するのはポストの少なさだけが理由か？）
- ・女性限定枠（採用の）を逆差別と考えるか？幅広い年齢、性別、役職から考えを聞きたい。
- ・女性の意識を変える。あえて男性 VS 女性など
- ・男性の意識改革について
- ・学振の基盤研究費
- ・学振研究員の雇用問題
- ・フェロシップということなので、PD、RPD のその後など、フォロー Data の紹介
- ・PD の採択率や博士課程修了後のサポートについて
- ・DC
- ・主に大学職員を目指している人が多いが、全ての人になれる訳ではないので、大学職員以外の事例などを学振が提示すべきと思う。
- ・雇用機関の問題もかかわってくると思うので、大学運営側も加えて議論したらよいのではないかと。
- ・博士修了生の研究・開発職以外、あるいは専門以外の職について事例の紹介
- ・博士号取得後、企業の研究員として働いている方のワークライフバランスの事例等を紹介してほしい
- ・修士、博士学生の就職問題（ラボで受け入れてもらえない）
- ・生涯どのような研究に関わっていくか。
- ・若い研究者のキャリアビジョンについて
- ・若手研究者の未来について
- ・若手の独立時（設備をどうするのか）について
- ・若手、女性研究者のキャリアパスについて
- ・オーバードクターについて
- ・日本の定年制について（米国だと差別になるので）
- ・技術職員の立場向上について
- ・学生の指導について（研究だけでなく）
- ・学生の育成とマスター、ドクターでの悩み

【問 10】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・女性の Speaker が増えたことは良い。
- ・シンポジウム、ワークショップなどのオーガナイザー、口頭発表者における女性比率が学会員全体における比率と比べて低い問題について、今後は改善されていきそうだとすることで嬉しく思う。
- ・オーガナイザーの女性比率が低いのは、高キャリアの女性率が低いから当然だと思うが、女性研究者が増えているので増加していくと思う。
- ・年々女性の参加率は増加しているが、まだまだ改善の余地がある。
- ・大学院ではかなり女性が増えた印象があったが、資料の数字をみるとまだまだ少ないことが分かった。
- ・自分の周囲では（若い世代）女性が結構増えているという認識だったが、全体的に見てもそのような傾向ではあるが教授など高ポストにつく人や、学会でオーガナイザーを務める女性はまだまだ少ないと感じた。
- ・年をとるごとに女性が減っていることが印象的。
- ・ワークショップのオーガナイザーの女性比率の低さが気になる。
- ・上位職ほど女性が少ないこととパラレルかもしれないと思った。
- ・女性オーガナイザーが少ないのは、今回話題のライフイベントにも強く影響されているのでは？（子育て、育休による研究中断の影響、宿泊をともなう出張）
- ・オーガナイザーやスピーカーは圧倒的に男性が多いと思った。やはり育児などの問題が解決されないと、なかなか研究者でもキャリアアップしていく女性は増えていかないのかなと思った。
- ・女性が研究者になることの敷居の高さと、一般演題演者の性別・階級を見て思った。
- ・海外の学会に出席すると、女性のシニア研究者が 4 割程占めていて驚く。日本では学生、大学院生を除くと女性研究者はとて少ない。この違いは何なんですか？
- ・女性研究者の増加を目指すのであれば、国策として何かしないと難しいのでは。結局ライフイベントに依存して職種を選ぶ必要がある、という現状に問題があると思う。
- ・女性研究者がまだまだ少ないことを実感した。
- ・思ったより女性発表者が少なく驚いた。
- ・女性が少ない。
- ・女性の少なさに驚いた。男女共同参画初期と比較してみたい。
- ・やはりまだまだ男社会なのだと感じた。
- ・女性比率を上げるための大会側の努力不足が継続して見られる。

- ・女性研究者が発表しやすい雰囲気をつくるべきである。
- ・外国との比較が欲しい。おそらく本両学会の意識が現状肯定的なので、この様なショッキングな結果となっているのではないか？
- ・女性がオーガナイザーをすることが定着するまで、ある程度強制してみたらどうですか？指名されたら女性も頑張るのでは？
- ・女性が意外と多いなと思った。でも決して数の問題ではないのだとも思う。
- ・シンポジウム、ワークショップなどオーガナイザーの割合が高い事が女性が活躍していることにつながるのか疑問に思った。
- ・数値を上げるために女性のみのワークショップを作るなどはやらない方が良いと思う。
- ・男女比や属性を細分化してどうこうではなく、内容で選ばれた人がオーガナイザーを担当すれば問題はないと思う。
- ・ディスカッションの通り、男性よりも女性の積極性の問題が隠れていそうな気がする。この学会にもラボにも女性はたくさんいて、ある程度発言の自由も与えられていると思うので。
- ・資料にあった「疑問」がいまいちずれているような気がする。女性の年齢層で最も多い20～29歳は学生や独身女性が多いのだから。スピーカーやオーガナイザーができる方はそれなりに実績のある方なので、若い女性が少ないのは当然では？
- ・女性研究者の増加のために政策がとられているが、「優秀な人材であるから」という採用方針も忘れてはいけないと思います。
- ・女性の社会進出も含め、社会全体が抱える課題である。男女ともにチャンスを得るには何らかのリスクも伴う。
- ・独身男性だって頑張っているのだから、既婚女性ももっと色々な雑用をすべき。
- ・学生の意識改革が必要。
- ・現状のデータのみで、今後の指針を知りたい。
- ・かわりばえしないことに驚く。
- ・意外と母集団構成と関連している。
- ・採択率を示してほしい。絶対数の定義論は意味がない。
- ・どんな方が参加しているかよく分かった。
- ・一般演題演者の修士課程の人数の多さに驚いた。
- ・発表者の最多数層が修士学生であることには驚かされた。
- ・学生会員が多いことに驚いた。
- ・企業の発表者が少ない。
- ・職階分布のグラフがよかった。
- ・グラフが見やすくまとめられていた。
- ・細かく分析されており、動向が分かりやすい。
- ・数値化されたことで問題点が理解しやすかった。
- ・色分け効果で読みやすい。
- ・分かりやすい資料だった。
- ・見やすい。ゆっくり後で読みます。
- ・見やすかった。
- ・もう少し見やすくしてもらったらよい。
- ・なるほどと思った。

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・セミナー前後で同じアンケートを取って変化を見たい。
- ・食事に夢中になってしまう

〈ケータイアナライズシステム〉 コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメント
1	おやじ	清水先生、いい話ありがとうございました。
2	45歳	企画ありがとうございます
3	ジェニー	こんにちは
4	おやじ2	女性の社会的な歴史はあらためて勉強になります。しかし、出産が男性にはできないという別の「問題」も存在します。
5	YUZU	とても勉強になります。ありがとうございます。
6	フェロシップマン	学振で研究者を60歳までサポートできませんか？複数年雇用の更新にて。
7	に	RPDが雇用でないのなら、子供を保育園に入れられないのではないですか？
8	おやじ	RPDの採択率が高いのはなにか理由がありますか？
9	田中	自治体が学振がどういうものか認識してくれば、解決します。
10	なつ	雇用関係があるとなぜ主体的に研究できないと考えるのでしょうか？
11	Oversleeper	元RPDです。福祉事務所で交渉しまして、保育園入れました。
12	おやじ	保育園問題は国が悪いと思います。
13	ぐり	いい情報でした

No	ハンドルネーム	コメント
14	あ	学振が特別研究員の人件費を所属予定の研究機関に渡して、研究機関雇いにするということは制度的に難しいのでしょうか
15	採択率	高い採択率といっても20数パーセント。このくらいの人数は、我が国の科学技術を維持するための最小必要人数のような気がします。
16	Kayoko	昔、学振特別研究員のとき、毎年、子供たちの保育園に就労証明書を提出するときに大変苦勞しました。いまもこのことは整っていないようですね。なにか学振の決まった書面がダウンロードなどできると有り難いですね、、、
17	学振	研究者人生のフェローシップではだめ？
18	マイ	DCの特別研究員の数が多いいように思います。その分PDを増やせたら良いと思うのですが。私はPDの時にとても良い研究経験ができました。
19	あ	学振の制度は変えられない。その中でどうにかするしかない。固い。
20	元 RPD	16さんの意見、同意です。福祉事務所の方も学振についてよく知らないことがあると思いますので、何か書式があるととても助かります。
21	Kayoko	保育園入園や継続で、市から学振の書面を求められたことがあります、、、が、それはできないということで、結局、ラボのポストに一筆書いてもらいました、、、
22	あ	卓越研究員は、研究機関雇いと聞いたのですが何か違うのですか？
23	雇用	学振はファンディングエージェンシーで、理研やJSTは研究開発法人。これはシステムが違うのでどうしようもないのでは。
24	おやじ	所属機関に間接経費はだせないのでしょうか？
25	学振	学振PD3年が短すぎませんか？
26	45歳	学振の制度をどう自分のステップアップにつなげるのかな。
27	ケーキ	雇用したら、学振の意味がなくなるのでは？学振に多くを求めすぎ？全体の制度の問題？
28	16&21	いまは、昔と違って、学振が可能な範囲で書面を作成してくださるのですね！前進していますね。
29	雇用	卓越研究員は各研究機関の学長裁量ポストを充てるはずで。その際に学振が研究費を付ける。という話。
30	トレード	別居が前提は良くないです。大学間や研究機関間で、パートナーのそばへ移りたい研究者間でのトレードはできないのでしょうか？
31	と	こどもの保育園入れるのは女性だけの仕事なの？
32	アメリカ	アメリカでは、良い研究者を取るためにはそのパートナーも一緒に採用ということが多いです。
33	な	相手が転職になった際に、RPDを継続して、違う組織（海外も含め）でもらうことは可能なのでしょうか？
34	雇用	いまどこの大学もポストが厳しいので、夫婦だからといって特別に配慮して雇用するのは難しいのでは。そもそも大学の教員ポストが少な過ぎる。定割の影響で大学に余裕がなくなっているのが一番の問題。
35	継続	自由な発想で自由な場所で研究ができる、という理念ならば大学院時代から場所を変えずに新たな研究を開始させても良いのではないのでしょうか。
36	39歳	所属機関内に保育所を開設する
37	ケーキ	別居の問題は、何も研究者だけの問題ではないのでは？一般企業でもありえます、多くの場合は男性の単身赴任ですけど。
38	国立大学の教員	学振ポストの雇用の問題も、クロスアポイントの問題も、ボトルネックは国立大学だとポスト数を簡単には増やせないことだと思う。
39	保育所	保育所大賛成。特に学部の学生に開放すれば、女性研究者はキャリアをスタートする前に出産が終えられる。
40	よし	我が家も研究者夫婦ですが、相互にバランスをとれるように、よく話し合いをしています。まだ、異動に直面していないので、どうなるかわかりませんが、私はいつまでも2人で研究者やれるようにしたいですね。いずれにせよ、夫婦の問題だし、周辺の理解を得ることでしょうか。
41	Oversleeper	先程の岩崎さんのご意見、RPDは小さい子供がいらないといけませんので、別枠のPDがあるといいかもしれません。
42	45歳	若い人たちの意見は？

No	ハンドルネーム	コメント
43	田中	子持ちで海外は保育料が払えません。
44	な	海外の組織で RPD は取得できるのでしょうか？
45	25	任期付きのポストにも育児休暇がとれるようにしてほしい。
46	ゆとり世代学生	助教、准教授、教授以外の選択って何でしょうか。
47	講座制	結局古い講座制を維持している機関の方が、研究業績が良いという現実と、講座制を壊している現在とのギャップ。20 年先に基礎研究が発展しているためには、講座制の維持も重要。
48	お	海外の方が子育ては楽という人もいます。
49	制限	年齢制限や学位の取得年次の制限はナンセンス。
50	無知ですみません	PD や DC の男性受給者も育児休暇を取れるのでしょうか。日本だと理解が薄いので。
51	な	研究員を、文科省所属の国家公務員として雇用すれば解決するのでは？
52	dvm	学振の PD の申請の際に、今までの研究機関から受け入れ機関を変えたほうが良いというメリットは？
53	PI	皆が PI になりたい訳ではない。チームの一員として研究するのが大好きだ！という人は研究者になってはダメなのですか？そんな研究者が個々のプロジェクトを支えるのでは？
54	ひげ	フランス CNRS みたいな雇用形態はできないのでしょうか。
55	:	ライフイベントは常に優先されるべきです。40 歳からなんでも始められるようにしないとね。
56	リアリスト	現実問題として、各種の若手向けの研究資金（民間も含め）の取りやすさを考えると、助教 40 までに当然なる
57	ゆき	育メンと言う言葉は嫌いです。育児をする男性、それは「父親」です。
58	ゆき	女性の座長が少ないのは、日本の昔からある「女性は慎ましく」と言った悪しき風紀が残ってるためと思われます。男性はそういった考えを持たないようにしてほしい。
59	大学助教	育児をしながらの女性研究者のサポート制度以外に、配偶者（男性）の仕事時間に融通がきく社会にならないと解決していかないように思います。
60	ある学部生	学振のような、研究者を支援する制度の数自体が研究者の人数や研究の規模に対して少ないのではないかと？数が増えれば、育児休業を取る人・保育所が必要な人・海外に行く人など色々な状況の人に対応できる。状況や望む生活は研究者によって千差万別。少数の制度ではとてもまかなえない。
61	な	女性の意識も変わらなければ、男女共同参画は実現しないと私も思う
62	元 RPD	女性側の積極性、耳に痛いです。言い訳としては、ライフイベント付近は研究でいっぱいいっぱい学会活動が後回しになる期間がどうしても出てくるということもあります。
63	ミーティング	午前中ですが土曜日です。
64	ほ	研究者も時短を意識するべき。だらだらやらない。
65	:	会議もダメです。土曜日でもダメです。
66	みっさん	妊娠出産は女性しかできないが、育児は男性でもできる。男性ではなく、女性一般でもその認識が薄いのではないかと。
67	リアリスト	公募シンポジウムに、共同座長に女性に声をかけますし、シンポジストも同様です。やってみれば意外に大変ではないことが理解してもらえます。by 男性
68	田中	医学部があると、セミナー等も夜です。ちまちま大学にも文句言ってます。
69	ミーティング	ラボミーティングは平日の通常時間内にすべき。それができないボスはライフイベントに理解なさ過ぎ。
70	むむ	産後夕方 6 時開始のミーティングに出られない事が、分からないボスもいます。
71	時短	64 の方に同意です。 だらだらしないでメリハリをつけて仕事するべきです。
72	大学教員	ラボミーティングだけではないです。多くの会議が 17:00 以降
73	あ	ラボミーティングが定時以降なのはラボヘッドが授業とか会議とか他の雑務が定時内に多過ぎるのが問題だと思います
74	/	いろいろ勉強になりました。ありがとうございました。

【本当のPIになるために】

- 日 時：2015年12月2日(水) 12:40～13:45
- 会 場：神戸国際会議場3階 国際会議室(第15会場)
- 講 演：仲野 徹
(大阪大学大学院生命機能研究科 研究科長)

研究を志す者はみな、PI (Principal Investigator) という言葉には独特の魅力を感じるものではなかろうか。研究者として生きていく限りは、いつかはPIとしてラボをもって「〇〇研」など自分の名前を冠したラボを持ちたいと、多くの人が思うのであろう。PIになれば、誰にも命令されず、自分の好きな研究が好きなだけできる、それこそが研究者としての醍醐味ではないか、と。

ところで、日本におけるこのPIですが、近年大きく変化しつつある。以前の大学・研究機関では「教授」のみがPIであり、准教授(かつては助教授)以下はみな教授の研究をするということが一般的であったが、近年は若手研究者を早い段階から積極的に独立して研究をさせようという動きが進み、テニュアトラック普及・定着事業などの施策によって、独立准教授や独立助教などの junior PI (PIだが有期(任期付き)雇用で、一定期間で業績評価を受ける)のポストが増加してきた。その一方で、従来からの講座付き准教授・助教ポストも温存されており、これらの多くは今なお無期雇用である。それでは、ハイリスクの任期付き若手独立ポストと、ロー(?)リスクの講座付きポストが併存する中で、若手研究者にとって、そのどちらにメリットがあるのだろうか。テニュアトラック事業などがスタートしてそれなりの年月を経た今、これらの変化が果たして若手研究者のキャリアパスとして有用であったのかどうか、改めて検証してみる必要がある。

今回のキャリアパス委員会企画セミナーでは、「本当のPIになるために」と題して、これまでに数多くの若手独立ポストの制度設計からその運営に携わってきた、大阪大学大学院生命機能研究科長の仲野徹先生をお招きして講演をお願いするとともに、この制度の功罪について本音で議論することにした。仲野先生からは、自験例に基づいて、junior PI制度の展望や問題点について詳細な解説があり、特に重要な点として、(1) junior PI制度を設ける限りは十分なサポート(研究費やスペースなど)が必要 (2) 研究だけでなく、教育や運営にも携わることで様々な経験を積んでもらう (3) ある程度の人数の junior PIで始める必要がある(そうでないと組織内で孤立してしまう)などの指摘があった。また、「評価」の困難さについての言及もあった。多様化・細分化していく一方の生命科学分野において、junior PIの専門分野とは必ずしも同じでない senior PIが、その評価を適切にできるのか、という問題とともに、近年は研究成

果を high impact journal に掲載させるために膨大な量の実験を要求される傾向にあり、3～5年後の審査時にはまだ論文発表ができていないことが多いという問題も懸念される。そもそも、junior PIとしては、high impact journal を狙うべきなのか、ある程度の time frame でそれなりの雑誌に掲載することを目指すべきなのか、ということも考慮すべき点である。確かに「大物」を狙ったことで5年後に結局論文が出なかった場合はキャリア上あまりにも損失が大きいなどのことから、自分の研究の「相場観」を理解することが必要である。その他、junior PIが運営する小規模のラボでは、スケールメリットの点で不利であるとの指摘もあった。確かに、実験機器や試薬にしても、少量ずつ準備することは無駄が増えてくるので、ある程度の人数の junior PI でシェアすることが重要であろう。さて、junior PIとしてこういった研究遂行から種々の運営まで経験して、本当のPIになっていくために何が最も必要か、という点について、仲野先生は「愛される研究者」というキーワードを挙げられた。スーパーバイザーとなる教授達から様々なメンタリングを受けるにしても、同僚の junior PI や周囲のPIではないが無期雇用の准教授・助教と良好な人間関係を構築していくためにも、結局のところ「愛される」ことが何よりも重要であるとの指摘は、短くも本質を突いたものであると感じた。愛されるためにはどうすればよいのか、という課題は難しいものであるが、これは各自で考えていくべきことであろう。

ところで仲野先生からは、現状のテニュアトラック制度などは、制度設計としても、そのポストを得る junior PI にとっても、結局のところなかなか難しい制度ではないか、と指摘がなされた。大学・研究機関の運営費交付金が減らされる一方で、どこの大学もポストも資金も余裕がなく、完全独立した junior PI に対して十分なサポートを行うのはさらに困難になっていくと予想される。それに比べれば、現在の講座を大講座制にして、その大ポストの下のスタッフとして、研究テーマは独立した形で仕事をするようなポジション、いわば「部屋付き親方」のような形の方が望ましいのではないか。その中で、講座運営や学生指導に加え、様々な「雑用」を学ぶことで、本当にPIへとステップアップしていく方がより効果的で現実的なキャリアパスではないか、という提言とともに講演は終了した。

この後キャリアパス委員が登壇し、パネルディスカッションが始まった。このパネルディスカッションでは、ケータイゴングを用いてフロアからのアンケート結果や自由意見を取り上げながら進める予定であったが、開始直後はシステム不良でアンケートの集計結果が表示されないトラブルがあった。このため、仲野先生の講演を踏まえて「台本」にない本当に自由な討論を行った。ここ

では、仲野先生が最後に提言された「部屋付き親方」の具体性について議論があり、そんな寛大なポスト（教授）が本当にいるのか（仲野先生は、ご自身はそうだと仰っていたが）、またそうすることによってポストが得るものは何かあるのか（ラボメンバーの教育にとっても良い効果をもたらすという意見もあった）、こういった「人材育成」もポストの評価項目として考えるべきである、といった議論がなされた。しかしながら、大学教員の定員削減が進む中で、多くの講座でそのようなポストを現実的に抱える余裕がないことや、卓越研究員制度で目指す独立助教が、この問題を解決し得るのかについても疑問がある、等について指摘があった。

システムが作動してからは、聴衆から集めたアンケート結果を紹介しながら議論が進められた。まず今回の調査では、聴衆全体を「①学生やポスドクなどの非PI」、「② junior PI」、「③教授（full PI）」の3層に分け、それぞれに同様のアンケートを個別にかけることで、各ステージによる意見の相違を焙り出した。結果としては、①非PIの約6割がPIになりたい、さらに③の教授層の8割以上がPIになって「よかった」と答えた一方で、②の junior PIでも約8割が「よかった」と答えながらも、残る2割近くが「とてもよくなかった」と回答していたことが特徴であった。一定期間に成果を求められてポジションが左右されるテニュアトラックPIには、一定の割合で研究がうまく行かないこともあり、「とてもよくなかった」との回答につながったのではないかと、それ自体は自然なリーズナブルな結果ではないかと、との意見もあった。その他、PIになりたい、なってよかったと回答した理由としては、「自分の好きな研究ができるから」や「研究者として生きていく限り、PIを目指すべきだから」が多く、その他、「カッコいいから」や「誰にも命令されなくて済むから」などがあった。実際にパネリストからも、自由度をもって研究ができることのメリットを唱える声が多かった。一方でPIになりたくない、なってよくなかったと回答した理由としては「一定期間内に成果を挙げないといけないのがストレスだから」というのが最も多く、パネリストからはストレスを楽しむくらいの余裕がないとPIの仕事は厳しいのではないかと指摘もなされた。

さらには、PIになるために必要なものを聞いたところ、非PIからは「研究費」「それまでの十分な研究実績」「人間性」など、すでにPIとなっている側からは「研究費」「人間性」が挙げられ、「それまでの十分な研究実績」がやや少なくなる傾向がみられた。これを元にパネリストで議論した結果、「研究費」が必要なことは当然であるものの、それを得るためにも、また学生を指導し、ラボを運営していくためにも結局は「人間性」が重要である

うということになった。ここでも仲野先生が講演の最後で触れていた「愛される研究者」というのが一つのキーワードとなりそうである。研究も所詮は人間がすること。もちろん素晴らしい研究を行うことは重要ではあるが、やはりその研究を行う研究者の人間性を含めた総合力で評価されていく、ということが議論された。

本セミナー全体を通して得られた結論としては、 junior PIを経て本当のPIとなるためには、研究者個人としては人間性を高める努力を通して「愛される研究者」になることが肝要である、ということ、制度としては現状のテニュアトラックよりは、大講座に属しながら研究テーマとしては独立した形の「部屋付き親方」のようなものがより理想的であろう、ということであろうか。いずれにしても、どのようにしてPIを目指して生きていくべきかについて、決まった正解がある訳ではないにしても、フロアとパネリストが一体となって議論できたことに大きな意義があったと言える。

なお、私個人としては、仲野先生が本セッションの最後に話された内容に強く興味を惹かれた。それは、PIにとって最も大切なことは「研究テーマを決めること」であり、これは決して容易なことではない、ということ。特に気になったことは、教授になって最初の10年くらいは同じテーマでやっていけても、その次の10年、また次の10年とアクティビティを保つためには、次の新しいテーマを考えていかないといけない、という点である。確かに、教授になるまでは威勢がよかったのに、しばらくすると埋没してしまう研究者というのは少なからず存在する。遺伝子クローニングやノックアウトマウスが簡単にできる今、モノ（分子）を取って「一発当てる」ことは宝くじに当選するようなものかもしれない。それで教授になり、その分子に拘ってファミリー分子のノックアウトマウスを片っ端から作成したり、その分子を標的とした創薬研究の真似事のようなことをしてみても、確かに10年くらいで尽きてくるように思う。しかし、宝くじに2度当たることはない。だからこそ、今の研究がうまく行っているときにこそ、次のテーマを真剣に考えていく必要があるわけで、それができる研究者こそ本当に実力があり、長年に渡って活動を維持できるであろう。本当のPIになるためには—それは単に教授になることではない。教授になっても研究者として終わってしまう人もたくさんいる。本当のPIになるためには、常に向学心を忘れずに学問を追求し、自然の中にある疑問を虚心坦懐に見つめる姿勢そのものではないか。私自身、まだ本当のPIではなく、それに向けて切磋琢磨していかなければと、自戒を込めて本企画の総括とする。

（文責：座長・石井 優）

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】 あなたの年齢は？

① 24歳以下	41	20.2%
② 25～29歳	56	27.6%
③ 30～34歳	32	15.8%
④ 35～39歳	22	10.8%
⑤ 40～49歳	36	17.7%
⑥ 50～59歳	15	7.4%
⑦ 60歳以上	1	0.5%
※ 未記入	0	0.0%
計	203	100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	13	6.4%
② 大学院生（修士）	33	16.3%
③ 大学院生（博士）	49	24.1%
④ ポスドク	20	9.9%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	63	31.0%
⑥ 大学教員（教授）	10	4.9%
⑦ 研究員	5	2.5%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	5	2.5%
⑨ 企業	3	1.5%
⑩ その他（大学職員）	1	0.5%
⑩ その他（記述なし）	1	0.5%
計	203	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	53	22.5%
② 大会ホームページ	73	30.9%
③ 会報	6	2.5%
④ プログラム集	66	28.0%
⑤ ポスター	11	4.7%
⑥ 会場内の広告	10	4.2%
⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	13	5.5%
⑨ その他（ランチョンセミナー事前予約）	1	0.4%
⑨ その他（キャリアパス委員）	1	0.4%
⑨ その他（記述なし）	2	0.8%
計	236	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	193	95.1%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	7	3.4%
※ 未記入	3	1.5%
計	203	100.0%

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	136	67.0%
② まあまあ面白かった	51	25.1%
③ 普通	5	2.5%
④ あまり面白くなかった	2	1.0%
⑤ つまらなかった	1	0.5%
※ 未記入	8	3.9%
計	203	100.0%

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	92	45.3%
② まあまあ面白かった	80	39.4%
③ 普通	12	5.9%
④ あまり面白くなかった	5	2.5%
⑤ つまらなかった	1	0.5%
※ 未記入	13	6.4%
計	203	100.0%

【問7】 今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	169	83.3%
② 続けるべきだが方法を変えた方が良い	17	8.4%
③ やめた方が良い	0	0.0%
④ わからない	7	3.4%
※ 未記入	10	4.9%
計	203	100.0%

【問8】 このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・ 仲野先生の講演はわかりやすく非常に良かった。同時にPIとしてやっていくことの難しさと制度上の問題もまだまだあるように感じた。このテーマは定期的にやるべきだと思う。
- ・ 自分はいまテニユアトラック助教だが、仲野先生の講演が勉強になった。
- ・ 研究者はPIになってから、という仲野先生の言葉を聞いたのがよかったです。PIになれるのは一握りの人間しかいないので、多くのPIの方のコメントが一同に聞くことができ貴重な時間だと思いました。
- ・ 仲野先生のお話がとてもおもしろかったです。
- ・ 仲野先生のお話をきいて、その意見を国の支援に反映させてもらえると良いと思う。
- ・ 仲野先生は大変すばらしい講演をして下さったが、これは、制度や国、大学、上司たちが実際に動いてくれないと実際にはほとんど変わらないと思う。その環境を知ってもらって、よりよい環境が築かれることを望む。
- ・ 前半のセッションは非常に興味深かった。
- ・ 前半の講演がとてもためになる内容だった。親講座のPIも単に若手を使うだけではなく、人材育成に関心があり、かつ部下にチャンスを与え、独立したテーマをさせることに理解を示すことがPIの育成につながると思います。
- ・ 前半もう少し複数の人の話があると良い。
- ・ 長めに枠をとって、もっといろいろな人の意見を聞いたら良かった。
- ・ ディスカッションはもう少し時間があつたほうが良い。
- ・ PI以前の人（ポストドク）が前に出て欲しかった。
- ・ パネリストにポストドクか助教がいるとおもしろい。
- ・ パネリストにPIを目指す非PIの人が必要だと思う。すでにtenureの人の意見は参考にはなるが、non tenureの人の気持ちは理解できない。
- ・ パネルディスカッションの議論の方向性が定まらなかった気がする。人数をしぼってもよいのでは（発言がないパネリストもいましたし）？
- ・ 比較的、先生方の生の声を聞いたのはよかったと思う。逆に、失敗談や「これはよくなかった」といったお話も聞いてみたかった。
- ・ 成功者だけでなく、失敗者もパネラーとして招いて欲しい。
- ・ 順調に成功している人ばかりでなく、ひどく苦労した人の話もききたい。
- ・ 後半のパネルディスカッションは、もう少しまとまりがあると良くなったと思う。
- ・ ディスカッションが特におもしろかったです。もう少しいろんなパターンでみてみたいです。
- ・ 講演でそれぞれの立場の人に対する意識確認が出来たので良かったと思います。
- ・ パネラーの意見が活発で良かった。仲野先生 good！ズバズバ発言してくれるパネラーが良い。
- ・ 胡桃坂先生の最後のコメントも非常によかった。部下をハッピーにできるかということも重要。

- ・胡桃坂先生がコメンテーターだったのはとても良かったです。元気づけられました。
- ・胡桃坂先生が活性化していて楽しそうだった。
- ・パネリストの先生方の率直なお話が聞けて面白かった。
- ・パネリストも雰囲気が多様でとてもよかった。
- ・若手PIの方の本音がきけておもしろかったです。
- ・経験ゆたかな先生方の討論、面白かったです。
- ・普段聞くことのできない貴重なお話を聞くことができ、大変有意義であった。
- ・実状に関する素直な意見が聴けて面白かったです。
- ・このような機会はあまりなく、先生方の生の声を聞くことができ貴重だった。
- ・このような話を聴く機会がないのでとてもおもしろかったです。
- ・なかなか聞けないような、いろいろな話やPIのコツが聞けてよかった。
- ・若手の人にPIというものがどういうものであるか理解してもらうことができ良かったと思う（具体的なイメージ）。
- ・PIになることへの様々な考え方を知ることができてよかった。
- ・自分は特にPIを目指していたわけではなかったが、お話をされていた研究者の方々の楽しそうな姿を見て、PIを目指すのも面白いかもしれないと思った。
- ・PIになってからのやりがい、苦労を知れてよかった。
- ・PIについての現実が知れたのでおもしろかったです。
- ・博士修了後のキャリアプランについて不安を感じており、不安な点を多く取り上げていて共感できる部分が多かった。今の制度が不十分であると考えている先生方の発言に安心した。
- ・大学院修士のうちからサイエンスにたずさわりたい人にはこのようなことを教えておくべきだと思う。
- ・体系的にはどのような話か全く想像がつかなかったが、おもしろく、今後のことを考える上で参考になった。
- ・一つの選択肢としてPIが示す未来予想は思っていたよりも興味深かったです。
- ・本題とは多少違う内容でも、若手研究者のかかえる問題の本質に触れる内容に関しては積極的にとり上げてほしい。
- ・学生、若手の参加者が多いなかで挑戦的なテーマだったと思います。正直、PI or non-PI よりも任期付か任期なしかということの方が若手の関心事と思う。
- ・ジュニアPIのメリットデメリットがよくわかりました。個人的にはやはりラボワーク、教育、研究費獲得以外で支えてくれる人が必要だと思います。
- ・少しでも将来について開けた視野がもてたと思います。現状は少々違いますが、若くしてPIになった方、ジュニアPIになった方などの経験を聞くことができ、非常に参考になりました。
- ・若手研究者にとって大変励みになる内容だった。
- ・愛される研究者、人間性… ステキなキーワードをありがとうございます。
- ・PIになりたてです。愛される研究者を目指します。
- ・小さくても論文を書き続けることの大切さを学びました。（大きいジャーナルでも5年に1回だと忘れられてしまう）と言われて、たしかにと思いました。
- ・今回出た意見をぜひ実現させてほしいと思った。
- ・思いを共有することが重要。このセッションはとても有意義だと思う。ただここでの話を外に働きかけることが必要。
- ・意識のギャップを知れておもしろかった。
- ・自分の大学では講師以上の方が部屋をもてるので、そのシステムの悪い面しか見えてなかったのかもしれないと思った。
- ・私のいる大学(名古屋市立大学)では、教授は任期制(7年・再任あり)、准教授以下は終身雇用です。そういうところもあります。
- ・現状分析は大事。
- ・親ボスの意識改革が必要！
- ・PIもいろいろありますが、大学教授になりたいなら多様な学生に対して教育をする気がなければダメだと思います。
- ・研究能力も大事だが、人として優れていないとラボマネージメントや教育コミュニティでうまくやっていけない。人として優れているかどうかはどうやって判断するのだろうか。研究だけできるしょうもない人が増えると組織として崩壊しそう。
- ・研究(実験)・教育・雑務、PIになった時にこれらをバランスよく行うのがやっぱり難しい。ラボを運営する立場になると自分で手を動かすことがあまりなくなってしまうのかと心配になった。
- ・国立地方大の助教は大変。行きたいPIメンターがいくらい枠がないので妥協せざるをえない。
- ・研究テーマ・課題の独立性、若手の支援が重要。
- ・若手支援は進んでいると思う。ポスドク1万人計画の敗残兵、高齢化ポスドクにも救済策が必要。
- ・教員の流動性をといて、教員をおいだし部屋で孤立させるというのもある。
- ・このセッションも特定の研究者のみに光が当たる方策と思える。もっと公平にもっと民主的に、研究環境と研究費の分配を考えるためのセッションを考えてほしい。
- ・わかったようなわかっていないような感じです。
- ・設問の解答で本音がきけて面白かった。
- ・リアルタイムで会場とシンポジストがdiscussionできるのはすばらしい。
- ・アンケートをその場で取って、それに基づいて話を展開するシステム自体はおもしろかったです。
- ・進行がとても良く、とても良い話が聞けて有意義でした。
- ・ディスカッションでは、生の声を確認しながら進んだので、実感が持てて良かったです。
- ・設問にとらわれず、進行中の議論にコメントできるとよい。
- ・オーディエンスの参加方法が煩雑すぎて見づらかったので、1つの画面にして意見を受け付けた方がいいのでは。
- ・もう少しコメントを集める際に解答別毎及び自由討議中のコメントがあると良い。
- ・アンケートはあまり面白くなかった。
- ・パソコンシステムのエラーで中だるみ気味。ランチョンで時間が決まっているからせかされる。
- ・後半のセッションおよびアンケートの字が全体的に小さい。
- ・アンケートが小さいスライドしか映っていませんでしたので、後方の席だとわからなかった。
- ・画面が見えづらかった。
- ・右前のスクリーンが見えづらかった。
- ・パネルディスカッション中の顔が見えない。モニターに映してほしい(固定カメラでOK)。2画面とか。
- ・ニコニコ動画等で、より大規模なオンラインディスカッションもしてほしい。

- ・双方向性は面白い試みだと思うが、スマホもタブレットもない人もいるので、PC用のWi-Fi環境がほしかった。
- ・アンケートを会場で取るのでしたら、Wi-Fi環境がある部屋で実施してほしかったです。
- ・参加型セッションなら会場にWi-Fiを用意して下さい。
- ・webで会場参加型にするなら、会場にWi-Fiをとばしてほしい。
- ・free Wi-Fiが使えないとネットにアクセスできない。スマホありきなのはどうだろうか？研究費でモバイルルーターを購入している先生とは立場がちがう。
- ・スマートフォンを全員が持っているとは限らないので、internetを使える環境にした方が良いと思います。
- ・卓越を知らなかったのが助かった。
- ・卓越研究員制度は知らなかったため勉強になった。
- ・卓越研究員制度、もっと採択数が増えれば良いと思います。
- ・卓越研究員について詳しく知れてよかった。
- ・夜で時間をもっととってほしい
- ・もっと時間が欲しかった。
- ・もっと時間があれば良かった。
- ・もう少し長く時間をとっても良いのでは。
- ・もっと長くても良かった。
- ・時間が短かった。(同コメント2件)
- ・時間が足りない。
- ・時間が長すぎる。
- ・面白くはなかった。
- ・面白かった。(同コメント3件)
- ・とてもためになりました。
- ・とても参考になりました。
- ・今後の参考になった。
- ・大変勉強になりました。(同コメント2件)
- ・勉強になりました。(同コメント2件)
- ・いい勉強になりました。
- ・たいへん有意義であった。
- ・とてもおもしろく有意義でした。
- ・アザス

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあればお教えてください。

- ・(安心して) 博士課程に進む学生が増えるようなキャリアパス企画
- ・博士修了後のキャリアについて
- ・博士号取得～講師・準教授までのキャリアパスについてもう少し詳しく取り上げてほしい
- ・実際にジュニアPI、テニユア期間中の研究者をパネリストにしたとりくみ
- ・テニユアの生き方について
- ・PIよりも前の若手時代の過ごし方について
- ・ポストドク問題について
- ・40才を超えたポストドクの将来。どうポジションを得ていけばよいか？
- ・ポスのちから (PI前後で)
- ・独立した体験談 (PIによる)
- ・PIの人生披露
- ・PIの実際の仕事内容 (ラボマネージメント等) について詳しく聞いてみたい
- ・PIに最も必要な研究費について
- ・研究費獲得についてのノウハウ
- ・研究費を若手がとる方法
- ・ポストなどの現状についてもっと知りたいです。若手とポスのパネラーでバトル/ディベート
- ・終身雇用かどうかはともかく、ラボマネージャーやテクニシャンの日本における地位やポストを考えてみたい
- ・研究者全般の待遇を良くするためにどうすればいいか、あとは議論だけでなく、実際に行動をしてほしい
- ・どういう人材がほしいか？
- ・常に新しい視点があり、おもしろいテーマをもち続けるには？
- ・研究テーマの選び方について、良いテーマとは？
- ・学生には大きなテーマが良いのか、1人でできるテーマが良いのか
- ・各立場 (教授、助教とか) の人が思うラボ運営やPIの意見の比較はおもしろそうだと思います
- ・ラボのみんなが気持ちよく仕事をするためのラボ運営のやり方 (実例をいっぱい聞きたいです)
- ・大学の研究室の方向について
- ・アカデミアと企業研究者の違い
- ・非PI、非アカデミア職
- ・最後に小林先生もコメントされていたが、「いい研究者といいPI」について、違いや同一点などを
- ・ポストドクは世間から何を期待されているのか？どのように社会へ還元されるのがよいか？
- ・有名大学や名の知れた教授、海外有名大学研究室出身の研究者ばかりが目され、教授へのステップが上がっていくことに長く疑問を感じている。このような状況からより公平な生命科学の研究体制になるように考えてほしい。
- ・ラボコミュニケーション
- ・論文の評価法
- ・アカハラ問題
- ・ブラック研究室・ブラック大学

- ・大大学と地方大学の格差
- ・理研 PI の話を聞く、など
- ・男女共同参画の話題が少なくなっているのでそれを
- ・しくじった人の話を聞くべき
- ・本題と同じテーマを再度行ってほしい
- ・愛される研究者の件を深堀り
- ・タンパク質の精製、結晶化について
- ・留学について
- ・海外留学について
- ・海外留学（ポスドク）
- ・留学後のキャリアパス

【問 10】 本大会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・研究者は男性が多いと思った。
- ・女性が少ないと思った。
- ・参加者に思ったより女性が少なくてびっくりした。
- ・全体的に女性が少ないのが残念だった（自分も女性なので）。
- ・女性の研究者・助教・准教授の割合がまだまだ低いと感じた。
- ・学生だと女性が多いのに、上のポストに行くほど減っていくのが気になった。
- ・保育室の整備のみならず、費用サポートなどでも女性の参加をしやすくすべき。
- ・今後女性がさらに活躍できるようになってほしい。
- ・バランスがとれるのはまだまだ時間がかかると実感しました。
- ・焦りや恐怖を常にかかえているがゆえに、小さくまとまらざるをえない。すなわち、夢や希望が抱けない雰囲気がガツガツ伝わってくる感じでした。
- ・若手・女性でテニユアで半部屋付の身分の自分は相当恵まれているかもと思った。
- ・まあ予想通りかなと。正会員の女性比率が2割弱しかいないのに、女性教員30%以上等のアフターマティブアクションはいきすぎと思う。
- ・確かに女性は少ないと思うけど、だからといって最近では女性だけが応募できる補助金やポストの募集が多いのは良くないと思う。機会は均等じゃなきゃいけない。採用者の男女比が応募者の男女比率と同じ比率になるのが本当の公平かと思う。最近の女性優遇はよくない。
- ・確かにスピーカーやオーガナイザーの女性割合は低く感じるが、その立場になる可能性のある女性博士課程の人が少ない方が問題だと思いました。女性の人は博士号をとるメリットを感じれないのでしょうか。
- ・女性の活躍は、意識改革・教育を継続的に進めていけばおのずと数字として目に見えて上がっていくと思います。
- ・女性発表者が増加傾向にあり、共同参画の成果が出てきているように思える。
- ・女性意識の改革。
- ・若手が増えていけばいいと思います。女性と男性の区別が必要かは疑問です。
- ・70歳以上の演者がいることに刺激された。
- ・知識ひろめ。
- ・妥当だと思う。
- ・昨日見たものだった。
- ・見やすかった。
- ・分かりやすくて良かったと思います。
- ・非常に見やすかった。
- ・いろいろ参考になる。
- ・分析は常に重要であるので、大変と思うが続けてほしい。
- ・PIを知らなかったなので、資料があつてよかった。

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・ランチョンセミナーの事前予約制はやめてほしい。全然アクセスできなかった。
- ・イスの間隔が広くて非常に良かった。

〈ケータイアナライズシステム〉

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問：皆さんの属性について教えてください。

・学部学生、大学院生	90	46.2%
・ポスドク、助教、講師、研究員等の非 PI 職	72	36.9%
・准教授、主任研究員等の junior PI 職（テニユアトラック）	14	7.2%
・教授等の PI 職（テニユア）	11	5.6%
・企業	4	2.1%
※未入力	4	2.1%
計	195	100.0%

設問 1-1：(練習設問で学生、非 PI 職、企業のいずれかを選択した方) これから PI になりたいですか？

・ぜひになりたい	99	60.4%
・なりたくない	20	12.2%
・どちらともいえない	45	27.4%
計	164	100.0%

設問 1-2：(練習設問で junior PI 職を選択した方) PI になってよかったですか？

・とてもよかった	5	29.4%
・ややよかった	9	52.9%
・ややよくなかった	0	0.0%
・とてもよくなかった	3	17.6%
計	17	100.0%

設問 1-3：(練習設問で PI 職を選択した方) PI になった現状に満足していますか？

・満足している	5	26.3%
・まずまず満足している	11	57.9%
・やや不満	3	15.8%
・非常に不満	0	0.0%
計	19	100.0%

設問 2：PI になりたい、また PI になって満足している理由は？ (複数回答可)

・自分の好きな研究ができるから	57	51.8%
・誰にも命令されなくて済むから	7	6.4%
・かっこいいから	14	12.7%
・研究者として生きていく限り、PI を目指すべきだから	25	22.7%
・その他 (コメント下さい)	7	6.4%
計	110	100.0%

設問 3：PI になりたくない、また PI になって不満な理由は？ (複数回答可)

・誰にも教えてもらえなくなるから	3	6.4%
・研究費が取れないから	7	14.9%
・一定期間内に成果を挙げないといけないのがストレスだから	18	38.3%
・いい学生が来てくれないから	3	6.4%
・ラボマネージメントが煩わしいから	8	17.0%
・その他 (コメント下さい)	8	17.0%
計	47	100.0%

設問 4-1：(PI 以外の方)「本当」の PI、満足できる PI になるために必要なものは何でしょうか？ (2 つまで回答可)

・研究費	44	24.6%
・それまでの十分な研究実績	41	22.9%
・人脈	33	18.4%
・運	16	8.9%
・人間性	40	22.3%
・その他 (コメント下さい)	5	2.8%
計	179	100.0%

設問 4-2：(PIの方)「本当」のPI、満足できるPIになるために必要なものは何でしょうか？(2つまで回答可)

・研究費	12	31.6%
・それまでの十分な研究実績	4	10.5%
・人脈	5	13.2%
・運	5	13.2%
・人間性	10	26.3%
・その他(コメント下さい)	2	5.3%
	計 38	100.0%

コメント一覧

【設問1】

No	ハンドルネーム	コメント
1	わんわん	PIをサポートするためのラボマネージャーの立場もまた必須なのではないかと思います。しかし、ラボマネ的な役割が結局(えてして有能な)助教やポスト等へまわされ、そのエフォートが大きく削がれているのが現状です。その部分の解決が置き去りにされているのは、そういう方針、時代の流れなのですか？
2	独立	いつかは独立したいです
3	半独立	部屋つき状態のものです どうやって、教授のメンタリティーを変えるかが、課題であり、その解決策はなにか？
4	あ	プレイヤーの能力とマネージャーの能力は別だと思う。正直主に論文だけで選抜される'優秀な'研究者は実験手技も未熟なことも多い。そもそもいつまでたっても研究以外の雑務も多い。若手を伸ばして行くにはそんな人達を支える、例えば博士ラボマネージャーなども学科単位でパーマネントで雇える・育てる制度も国策として必要では？
5	独立	半独立という制度があるとスムーズにPIに移行しやすいと思います。
6	??	こんにちは
7	助教独立	助教で独立は正直、資金面などでかなり不安です。部屋持ち独立資金はほぼ無しです。地方国立では様々なサポートが不足していると思われます。
8	アカデミア	丁稚のまま飼い殺しにならないようにするにはどうすれば良いでしょうか
9	半独立	研究テーマの独立性と言っても、論文になる時に corresponding author になりたがる親ボスが多いようですが、その点はどう思われますか？
10	パンダ	スケールメリットはすごく感じる。
11	な	事務仕事は組織のパーマネントのラボマネージャーにさせていただき、PIは研究、学生指導、講義を中心にできるようにしていただきたい。
12	??	自分の興味のあるテーマと関係しているボスを見つけられるといいのですね。
13	貝	日本ではなぜ、テクニシャンやラボマネージャーのような「研究をサポートする」立場の人が少ないのでしょうか？予算の問題？
14	助教 テーマは独立	ラボは1つでテーマは独立です。学生の指導、資金の使い方などが学べてありがたいです。小さいラボだから可能なかもしれません。
15	部屋つき	自分の研究室から pi が排出されていくことが、教授の評価に直結していると、客観的にも思える状況に、どうすればなるか？(主観的な栄誉ではなく)
16	な	テーマの独立性がある場合、テーマを考えた人がコーレスポンディングオウサーになるべき。講座の教授は機器などを提供してくれたので最後から2番目になるかと思う。
17	カズヤ	よその学会でもケータイゴングのトラブルがあったけど、そのときはセッションまるごとアウトだったから会場スタッフの懸命さに一票
18	なっしー	やっぱり愛される研究者であることが大事なんですね

【設問2】

No	ハンドルネーム	コメント
1	どら焼	むしろ、PI以外の終身雇用の研究職を教えてください？
2	うーらん	自由度が何よりの魅力。ただ、どうやって評価されているのかが不透明な点が魅力を削ぐ。
3	貝	PIでないと、業績は「ボスのもの」と見られると思うので。
4	ab	PI以外のアカデミックの道のイメージがない。
5	親講座	PIが支配的ではなく、部下の育成、チャンスを与えることに熱心であることは不可欠
6	ソルト	研究以外（教育、ラボマネージング）の評価軸を作らずに、PI以外を拡充するのは無理筋では？
7	PI?	PIはそれほど魅力的ではないが、一生ポスドクや助教でいられないので、PIをめざすしかない。
8	ポスドク A	自分の好きな研究ができるなら半独立でも良いのですが、論文の責任著者が親講座のボスとなると、論文をどの時点で出すか（少しずつ出していくのか、ビッグジャーナル狙いでデータを貯めてから出すのか）を自分で決められなかったり、ボスが論文のチェックを放置したりで論文投稿が自由にできないのが困りものです。

【設問3】

No	ハンドルネーム	コメント
1	A	いつも予算獲得の書類書きばかりで中小企業社長の悲哀が滲み出ている人が多い。自分で実験できない。
2	とある修士学生	自分の手で実験をしたいからです。いつも書類仕事をされているイメージです。
3	あひ	成果あがらなかつたら無職の可能性があるからこそそのストレスではないですか？
4	ソルト	研究以外（教育、ラボマネージング）の評価軸を作らずに、PI以外を拡充するのは無理筋では？
5	貝	研究以外の雑用が増える印象があります。
6	??	その人に研究能力があるかどうか(直近の研究テーマで成果出なくても)を見極めるのもボスの仕事？
7	ます	理研のような教育なしの環境が理想的か(・_・?)

【設問4】

No	ハンドルネーム	コメント
1	gojiai ください	自分の大学は講師以上の方なら部屋を持てますが、研究室の人数が少なく、従来の形の研究室よりも研究が進んでいない気がします。
2	む	下の人がついていこうと思えるような、研究のビジョンが必要だと思います。
3	部屋つき	なるべく、自分が得意でないことは任せられる人を雇って任せられる、人的、経済的な環境を作ることが重要では？
4	評価のあり方	PIの評価として、部下をどれだけ育て、ハッピーにさせたかということも重要だと思います。
5	★	覚悟、だと思います。
6	部屋つき	一人でできることには限界があるので、より多くの人を巻き込んで、いろんなアイデアをすすめるとたのしい。その為のマネジメントであることが見落とされていると思う。
7	う	リソースやアシストを引き寄せる表現力
8	貝	「自分のアイデンティティ」と言える研究テーマを持つことが重要だと思います。
9	プロモーション	総合力を評価する尺度がないのが気になります。
10	き	人をひっぱるカリスマ性
11	a	運がなかったらどうしたらいいんでしょう。
12	わんわん	運は実力のうちではなく、運を活かすための能力が実力だと思う
13	なっしー	やっぱり愛される研究者であることが大事なんですね
14	??	PIの募集については、その時々で求められているものが、すでにPIでいる人たちとのバランスでも決まると思います。
15	とある修士学生	専門分野でのプレゼンスをいかに獲得するか。日本だけでなく、海外も含めて。結局、ひと、もの、かねをきちんと確保し、成果を出し続けることが大切なのですかね…

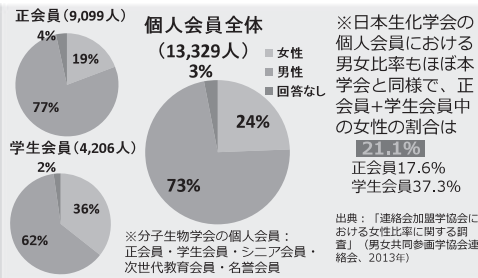


バランスの取れた研究環境を築くために ～2015属性調査から学ぶこと～

疑問：シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なく、より積極的に発表し、評価される機会を創出することだと言える。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会キャリアパス委員会は、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度（男女共同参画委員会/当時）から継続調査を行っている。今年は日本生化学会との合同大会（BMB2015）における結果をまとめた。

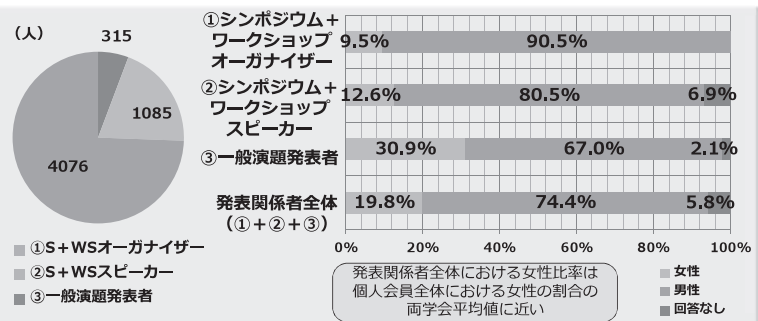
日本分子生物学会会員の男女比率 (2015年8月31日 現在)



BMB2015における属性調査

今回は5,476名が調査対象となった(のべ人数)。大会の演題登録システム(日本語版・英語版)にアンケート設問を設置(回答は任意)。性別、年齢、所属、職階(身分)について、発表者には投稿時に協力して頂いた(5,161名。Late-Breaking Abstracts投稿分は含まない)。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や学会会員データ(学会個人情報保護方針に依拠)なども併用した。

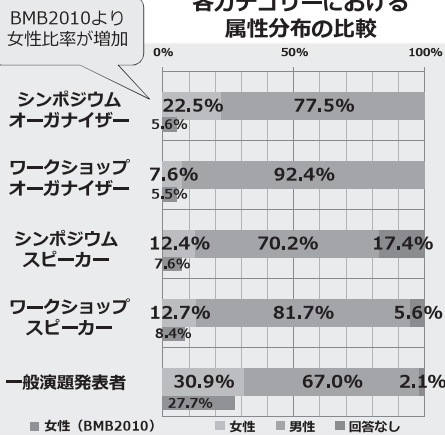
学会発表への参加の仕方



発表者が決まるプロセスの違い

- シンポジウムオーガナイザー：年会プログラム委員会で検討・依頼
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼
- ワークショップオーガナイザー：応募者(=自薦)の中から選抜される
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼(=他薦)
- 一般演題発表者：自発的な申し込み

各カテゴリーにおける属性分布の比較



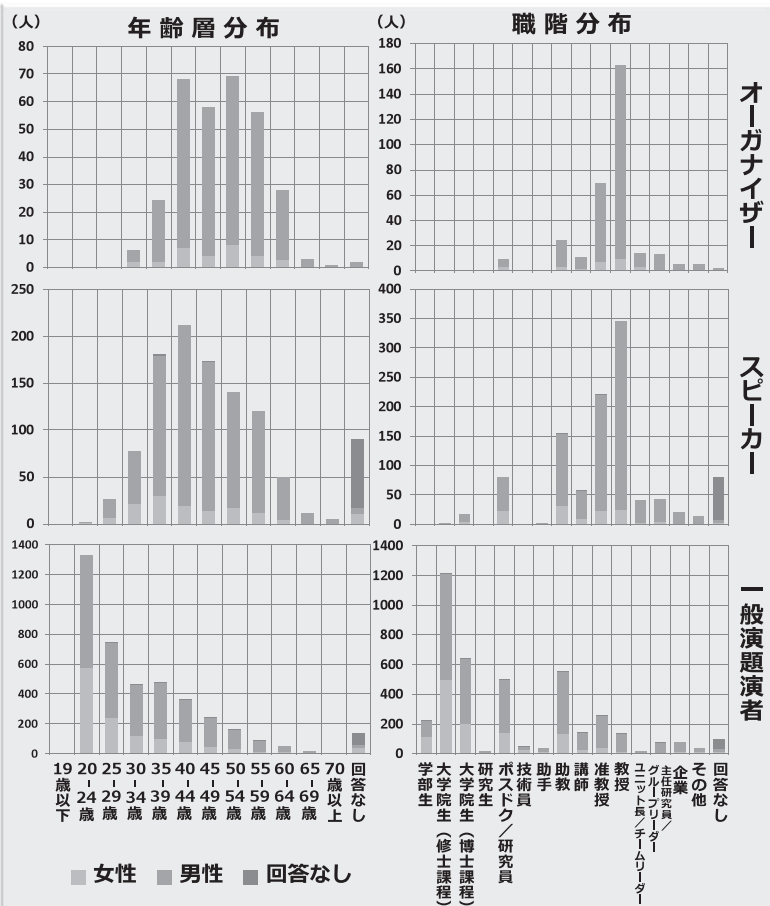
今年の傾向

発表関係者全体における女性比率が個人会員全体における女性の割合に近い値を示しているのに対し、スピーカーやオーガナイザーにおける女性比率は、それを下回っている。他方、前回合同大会を開催した2010年との比較においては、各カテゴリーの女性比率は全体的に増加がみられ、特にシンポジウムオーガナイザーではその傾向が著しい。冒頭に掲げた疑問については、調査の結果事実であることが数値の上で確認されたが、今後の伸びが期待される。女性・若手研究者を学術集会の場で今後どのように活かしていくかが、引き続き運営側の課題となる一方で、女性研究者本人の意識について把握し、自薦のカテゴリ(今大会における公募ワークショップのオーガナイザーなど)で女性比率の“増”を促進する方策を考える必要性を指摘する声もある。

本当にバランスのとれた状態を実現するためには、継続的な属性調査を行い、現状把握と取り組みの方向性を検討していくことが大切です。どうぞご協力をお願いいたします。



年齢・職階と発表カテゴリーとの関係は？



「女子中高生夏の学校 2016」実行委員募集のお知らせ

キャリアパス委員会 委員長 小林 武彦

「女子中高生夏の学校」(以下、「夏学」)は、女子中高生が科学技術の世界の楽しさを「体験」するとともにこの世界で活躍する女性と「交流」し、さらに科学技術に関心のある仲間や先輩と「知り合う」機会として、2005年度より開催されています。

これから進路について考える中高生に、分子生物学への興味を持ってもらうことが重要であると考え、本学会では第1回より毎回協力を続けてきました。

今年も例年通り「夏学」に分子生物学会のスタッフとしてご参加、ご協力くださる方を募集いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

女子中高生夏の学校 2016 開催概要

- ・主 催：独立行政法人 国立女性教育会館
- ・日 程：2016年8月6日(土)～8日(月) (2泊3日) (予定)
- ・会 場：独立行政法人 国立女性教育会館 (埼玉県比企郡嵐山)

〈募集内容〉「実験・実習」(参加生徒のうち10名程度対象)または「ポスターセッション(ミニ実験付)・キャリア相談ブース」をご担当くださる方を若干名。いずれも夏学2日目(予定)のプログラムです。

〈応募方法〉ご協力くださる方、ご興味のある方は、学会事務局宛 (info@mbsj.jp) にメールにて、お名前、ご所属先をご連絡ください。

〈募集締切〉2016年3月18日(金)

〈ご 参 考〉「女子中高生夏の学校 2015 参加報告」(日本分子生物学会ホームページ)

http://www.mbsj.jp/gender_eq/doc/2015_natsugaku.pdf

「女子中高生夏の学校 2015」募集要項・実施報告(国立女性教育会館ホームページ)

<http://www.nwec.jp/jp/program/invite/2015/page03.html>

◆特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第19期第2回理事会記録

日時：2015年11月30日(月) 13:30～17:50

場所：神戸国際会議場 4階「403」

出席者：荒木弘之（理事長）、佐々木裕之（副理事長）、塩見美喜子（副理事長）、一條秀憲（第39回年会長兼）、上村 匡（編集幹事兼）、影山龍一郎（第38回年会長兼）、糸 昭苑、小林武彦、斎藤通紀、相賀裕美子、塩見春彦、白髭克彦、眞貝洋一、杉本亜砂子、高橋淑子、林 茂生、水島 昇（会計幹事兼）、山本正幸、渡邊嘉典（広報幹事兼）、辻本賀英（監事）、深川竜郎（庶務幹事）、本間美和子（庶務幹事）、金井正美（広報幹事）、三浦正幸（集会幹事）、以上24名

欠席者：大隅良典、岡田清孝、貝淵弘三、小安重夫、篠原 彰（第40回年会長兼）、田畑哲之、仲野徹（集会幹事兼）、長田重一、深水昭吉、吉田 稔、吉村昭彦、花岡文雄（監事）、以上12名

事務局：福田 博（記録）、金子香奈里、並木孝憲、山口恵子

本理事会成立について：

本間美和子庶務幹事より、理事19名、監事1名、幹事4名が出席し、委任状12名（理事11、監事1）を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

荒木弘之理事長より、議事録署名人として、糸昭苑理事と眞貝洋一理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 報告事項

1) 執行部報告

・理事長報告

①本年1月、内閣府より本学会代表者あてに協力依頼があり、「第5回日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議」(2015.1.22開催)に出席し、理事長個人の立場としてヒアリングに応じた。ヒアリングの趣旨と出席した学協会は次のとおりであった。

〈ヒアリングの趣旨〉

○学協会と日本学術会議との関係についての認識（平成16年法改正による変化、現状）

○学協会の立場から今後日本学術会議に期待する役割

〈出席した学協会〉

日本社会学会、日本経済学会、日本医学会、

日本分子生物学会、日本地球惑星科学連合、日本建築学会

②大学附置研『共同利用・共同研究拠点』期末評価に関わるコメント提出協力依頼への対応
第16期理事会（2009年）のときに、大学附置研『共同利用・共同研究拠点』要望書に係る学会対応（サポートレターの提出）として、所定の手続きを経た施設に対し執行部を中心としたメンバーにて審査を行い、学会として協力を行った経緯がある。当時、認定された機関がそれぞれ期末評価の時期を迎えるが、それに関係して、本年3月～5月にかけて、前回協力したいくつかの施設より、拠点継続に関するサポートレターを提出してもらえないかとの要望が入った。

執行部にて検討した結果、本件は、当時第16期理事会にて審議・承認されている案件であるので、前回同様に学会審査を通った機関を対象に要望があった場合には、学会対応することとした。

結果、本年3月～5月において、4施設に対し理事長名による学会サポートレターを提出した。

③AMED（日本医療研究開発機構）から本会理事長あてに要望があり、基礎科学分野からの唯一の参画として、本学会理事長がAMEDアドバイザーボード委員になった。本学会理事長任期は2年であるため、次の理事長交代期において、次期理事長に同アドバイザーボード委員を引き継いでもらいたいと考えている。

④本年11月、HUGO（国際ゲノム会議）の日本開催誘致のためのサポートレターの発行依頼を日本側関係者より受けた。執行部にて検討した結果、本会と関わりの深い重要な会議であることは認識しているが、開催が決定していない会議への推薦状発行は今まで行っておらず、今回も見送る旨、返答した。

引き続き、荒木理事長より同様の協力依頼があった場合についての学会対応について意見が求められた。討議の結果、開催が決まっていない特定の団体（国際会議）から日本開催（誘致活動）の協力依頼があった場合、原則、対応しないことで問題がないことが確認された。

・庶務幹事報告

①会員現況

本間庶務幹事より、2015年11月16日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員	1名
正会員	9119名(海外在住229含む)
シニア会員	36名*新設
次世代教育会員	4名*新設
学生会員	4286名(海外在住69含む)
賛助会員	27社
合計	13473名(前年11月対比、-324)

(*上記以外に所定の手続きによる休会者10名あり)

②生物科学学会連合について

本間庶務幹事より生科連の活動状況につき報告がなされた。

○2020年IBO・JBO(国際生物学オリンピック)は日本で開催されるが、生科連として全面的にバックアップしていく予定である。

○学術会議関連議題であるが、生科連定例会議(2015.10.3開催)にて、「国立自然史博物館設立の提言作成」に向けての状況説明がなされた。

○生科連には、教科書問題検討委員会とポスドク問題検討委員会の2つの委員会が設置されている。ポスドク問題検討委員長には、本会の小林武彦理事が就任しており、昨年12月、資料「生科連からの＜重要なお願ひ＞」をもとに文科省等へ説明にまわっており、その後、文科省等関係者の助言を得て、本年4月には第二版を本学会ホームページで公開した。これらの活動に関連して「卓越研究員制度」が創設される予定である。

出席理事より「卓越研究員制度」についての様々な質問が出され、小林理事より本制度の詳細説明がなされた。

・広報幹事報告

金井正美広報幹事より学会ホームページの運用状況について報告が行われた。HPのコンセプト、2013年1月から現在までの月間アクセス統計、Facebookへのアクションを実行した人(最近28日間)の性別の割合等について説明がなされた。本学会HPでは、公募や行事の記事について年間350件ほどの掲載依頼に対応していることが報告された。

2) 第38回(2015年)年会について

影山龍一郎第38回年会長より、配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数はLate-breakingを含め4443題、そのうち879演題は口頭発表に採択された。事前参加登録は7194名となり、企業展示は401小間(NBRP、BioDBを含む)、ランチョンセミナーは18枠となり、順調に準備が進んだことが報告された。

引き続き、本合同大会のプログラム概要について説明された。

3) 第39回(2016年)年会準備状況

一條秀憲第39回年会長より、2016年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期：2016年11月30日(水)～12月2日(金)の3日間

○会場：パシフィコ横浜

○組織委員：

年会長 一條 秀憲(東大・薬・細胞情報学)

組織委員長 三浦 正幸(東大・薬・遺伝学)

プログラム委員長

村田 茂穂(東大・薬・蛋白質代謝学)

組織委員 新井 洋由(東大・薬・衛生化学)

後藤由季子(東大・薬・分子生物学)

富田 泰輔(東大・薬・臨床薬学)

多田 秀明(小野薬品工業株)

庶務幹事 名黒 功(東大・薬・細胞情報学)

○演題投稿期間：

2016年7月1日(金)～7月29日(金)

○事前参加登録期間：

2016年7月1日(金)～10月14日(金)

○年会HP：<http://www.aeplan.co.jp/mbsj2016>

(2015年12月中旬開設予定)

*12/16にオープンした。

年会開催コンセプト「半端なベクトルに出口無し!～徹底した基礎研究から広がる応用～」全体日程、シンポジウムの編成数(指定シンポジウム28、公募シンポジウム80企画を予定)ならびにポスター発表の時間設定・座長制について詳細説明がなされた。ポスター座長には1人当たり15演題程度を担当してもらい、それぞれ1演題のポスター賞を選んでもらう予定である。3日間で200名を超えるポスター座長をお願いすることになるので、理事会の方々にはぜひともご協力をいただきたい。

シンポジウムの言語については、外国人がいるセッションは基本英語とするが、議論を深めるためには必要に応じて日本語でのディスカッションを認めてもよいのではないかと年会長の考えが

示された。出席理事からも、分子生物学会年会には異分野の研究を勉強したいといった参加者も多いので、臨機応変に対応することに賛同したいとの意見が提出された。シンポジウム言語の取り扱いについて活発な意見交換がなされ、引き続き、年会組織委員会で検討し、決定していくこととなった。

4) 第40回(2017年)年会準備状況

篠原彰第40回年会長が本日まで海外出張のため、荒木理事長より、会期、会場、開催形式についてのみ、報告がなされた。適時、詳細は篠原年会長より理事会MLへ情報配信される予定である。
○会 期：2017年12月6日(水)～9日(土)の4日間
○会 場：神戸ポートアイランド
○開催形式：日本生化学会との合同大会(生化学会の大会長は大野茂男教授/横浜市大)

5) 上村匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

(i) 本年4月10日、京都にて編集委員会が開催された。出席した委員からは種々の建設的な意見を頂戴しており、その概要が紹介された。編集委員会では、若手がコレスポンディングオーナーとして気軽にチャレンジできるジャーナルとして認知されるということも重要ではないかと考えており、「GTCに投稿すれば有益な議論ができて論文の完成度が高まる」というような評価が若手の中で定着し、このジャーナルのファンや投稿のリピーターが増えることを願っている。

(ii) 従来からの「Original Article」に加え、重要な発見をすばやく出版することを目的とした短めのフォーマットである「Brief Report」(スペース含み20,000字以内、図表3点以内)の受付を開始している。

(iii) GTCは、投稿前に研究内容に近いエディターあるいはアソシエートエディターに相談することが可能である。特に以下のような要望があった場合、ぜひ相談していただきたい。

- ・他のジャーナルで、厳しい要求に応えたのにリジェクトされてしまった。

そのジャーナルでの point-by-point reply も提出するので、早く受理してもらえないか。

- ・競合する論文が in press と聞いたので、可能な限り早く論文を出したい。

(iv) 新たな投稿規定が浸透してきた効果もあり、2014年に減少していた投稿数も、本年は一昨年レベルに持ち直してきている。安定的な水準を維持するためにも、理事各位にはさらなる協

力をお願いしたい。

(v) 論文掲載時にオープンアクセスとなる「Online Open」について、現在、総説に限りその掲載費用(1論文あたり3,000ドル)を学会が負担している。GTC事業収支では黒字ではあるものの、年間どの程度の総説を受け入れるかなど費用に留意しながら運用していきたい。

(vi) 2011年に一新した本誌の表紙デザイン(伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を盛り込んでいる)は、丸5年となる今日でも高い評価を得ている。本年会のポスター会場の一画において、本誌の表紙ができるまでの裏話を盛り込んだタペストリー36作品(3年分)を展示するので、ぜひご覧いただきたい。

6) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

相賀裕美子賞推薦委員長より、2015年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、塩見春彦研究助成選考委員長より、2015年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

7) 小林武彦キャリアパス委員長より、配付資料に基づき、本委員会のミッション、委員会名簿、この1年の活動内容と実施したアンケート、男女共同参画学協会連絡会への参画状況について説明がなされた。

配付された資料は次のとおりである。

- ・キャリアパス委員会の活動内容
- ・年会演題投稿者における属性調査結果
- ・ライフイベントについてのアンケート集計結果(BMB2015における両学会企画テーマ選定のためのアンケートを本年7月に実施)
- ・ポストクのポジションにある方を対象としたアンケート集計結果(本年7月に実施)

本合同大会においてランチョンセミナーを2つ開催するので、理事各位においては積極的に参加いただきたい。

≪両学会共同企画(分子生物学会キャリアパス委員会/生化学会男女共同参画推進委員会)BMB2015ランチョンセミナー≫

「研究者のライフイベントを考える—目指すべき制度改正と環境改善—」

≪キャリアパス委員会主催ランチョンセミナー2015≫

「本当のPIになるために」

*2セッションいずれも講演+クエタイをつかった聴衆参加型ディスカッション形式を採用。

8) 富澤基金・基金運営委員会報告

山本正幸基金運営委員長より、富澤基金による第5回(2015年)日本分子生物学会若手研究助成結果につき報告がなされた。

(i) 第5回応募の受付期間: 2015年1月13日~2月10日

(ii) 応募総数: 92名(男性75名、女性17名)
※性別は名前からの推定による)

(iii) 選考:

- ・第1次審査: 書類審査
- ・第2次審査: 10名を対象に5月9日にヒアリングを実施

(iv) 審査経過と第5回助成対象者:

審査経過詳細については、会報111号(2015年6月号)に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第5回若手研究助成の助成対象者は以下の5氏である。

○小原圭介(北海道大学大学院薬学研究院)

細胞膜脂質非対称の感知機構と細胞応答の解明

Elucidation of sensing mechanism of plasma membrane lipid asymmetry and cellular response

○進藤麻子(名古屋大学大学院理学研究科)

細胞集団の不均一性を基盤とする組織形態の確立・維持機構

Cellular heterogeneity to drive collective cell movement during tissue morphogenesis.

○丹羽伸介(東北大学学際科学フロンティア研究所)

感覚受容細胞の形づくり

Molecular mechanisms that regulate the morphogenesis of sensory neurons

○宮腰昌利(秋田県立大学生物資源科学部)

原核生物における mRNA の 3' 末端から生成する small RNA による転写後調節

Post-transcriptional regulation by small RNAs derived from the 3'UTR of prokaryotic mRNAs

○村山泰斗(東京工業大学大学院生命理工学研究科)

ゲノム安定性に必須の Smc5/6 複合体の機能解析

Functional analysis of an essential genome stability factor Smc5/6 complex

9) 第4回(2016年)国際会議支援選考結果報告

篠原国際会議支援選考委員長に代わり、荒木理事長より、第4回目となる国際会議支援についての選考結果について報告された。本年の応募は1

件で、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと以下の会議が採択された。

〈会議名称〉

(和文) 第14回酵母国際会議

(英文) The 14th International Congress on Yeasts (ICY14)

開催責任者: 高木博史(奈良先端大・バイオサイエンス研究科 教授)

会期: 2016年9月11日(日)~15日(木)

会場: 淡路夢舞台国際会議場

助成金額: 200万円

10) 生命科学教育(高校などへの講師派遣の状況)について

篠原担当理事が欠席のため、事務局より配付資料が代読された。

高校などへの講師派遣の状況(2013年6月から現在までの実績)、および年会における高校生発表の状況(過去3回の実績と第38回年会の発表予定)について報告がなされた。

生命科学教育事業の活動周知の1つとして、本年も夏に開催された『SSH生徒研究発表会』に学会ブースを出展し、高校生や引率の先生に本学会の活動内容を紹介した。同発表会の会場において、学会キャラクターデザインを用いたグッズ(クリアファイル)を配布し、積極的な広報活動に努めた。

関連して、小林理事より私立の中高一貫校などでは「生物」の教員が減っている状況の説明があり、今後の生命科学教育の重要性について、出席理事より意見が提出された。

11) その他

本間庶務幹事より第38回通常総会の予定議題の説明がなされ、議事進行と報告担当者の確認、さらに第5回富澤基金贈呈式の式次第の確認が行われた。

2. 審議事項

1) 平成27年度(2015年度)決算承認の件

水島昇会計幹事より平成27年度活動計算書の収支について詳細説明がなされた。昨年の総会で前会計幹事より説明しているように、所管庁である東京都からの指導があり本年度決算よりNPO法人会計基準に基づいた計算書となっている。27年度会計は若干の赤字予算を組んでいたが、決算処理の結果、約1,268万円の黒字決算で終わることが出来た。黒字となったポイントは2つあり、昨年の第37回横浜年会の決算が黒字であったこと、もう1点は、『Genes to Cells』の出版社からの総利益折半の精算収入が、精算時の為替レート

(円安効果)の関係で伸びた点があげられる。会費収入については、納入率はほぼ前年と同様であるが、会員数そのものが減少傾向にあり昨年を下回った。経常費用については、事業費の内訳別収支の説明がなされた。さらに「日本分子生物学会若手研究助成 富澤純一・桂子基金」の決算について報告が行われた。

本決算において、消費税約 213 万円を納めており、その他の税務処理についても顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行った。

本決算は、10月26日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年11月12日に辻本賀英監事、花岡文雄監事による会計監査を受け、配付資料のとおり監査報告書が提示されている旨報告がなされた。

続いて、辻本監事より11月12日に学会事務局において会計監査を実施し、監査報告書に記載したとおり、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、同決算を認めたことが報告された。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第38回通常総会に諮られることとなった。

2) 繰越金(内部留保)の運用について

昨年11月に開催した第18期・第19期合同理事会において、前監事より付帯意見として以下の内容が申し送られていたことが、水島会計幹事より説明された。

*「繰越金のうちの何割かは長期国債などの運用も含めた効率的な方法を取られたらどうか、との意見が提出され、事務局にて会計事務所の専門家に助言を求めることとなった」(第18期・第19期合同理事会記録より)

水島会計幹事より、本件について学会事務局より公認会計士に相談したところ、以下のコメントを受領しており、当面は現状の資金保有方法を継続したいとの報告がなされた。

- ・NPO法人格をもつ分子生物学会のような学術団体が、内部留保のうちの一部を国債で保有することは、団体の性格からいって相応しくないように考える。
- ・すでに内部留保資金を複数の金融機関に分けて保有しているので(リスク対応は取っている)、ここで試算した程度の利息収入のために国債に切り替えるメリットよりも、国債に切り替えたことのデメリット(損失が出た場合の理事会責任)のほうが大きいのではないか。
- ・団体の性格にもよると思うが、学会の場合は、

会員による会費収入、学術年会参加費等が主たる収入源であるので、預貯金を債券保有に切り替えることは、会員の同意(総会承認)が必要であろう。

3) 平成28年度(2016年度)活動予算書承認の件 水島会計幹事より、平成28年度活動予算書と同活動予算・事業費の内訳について説明が行われた。

前年決算の実績をふまえて各科目を微調整しているが、大きなポイントは現段階(2015.10月現在のBMB2015見込収支)でBMB2015予算がやや厳しい状況にあり、その収支がそのまま学会全体の収支に組み込まれており(本年は合同大会であるので、大会終了後に6(分生):4(生化)で両学会に按分計上される予定)、法人全体として245万円の赤字予算を編成したことが説明された。

審議の結果、同予算書は理事会で承認され、第38回通常総会に諮られることとなった。

4) 次回理事選挙の女性理事枠について(細則改正の件)

荒木理事長より、本学会細則第2章 役員の選出の第2条5)にある、以下の条文が作られてきた経緯と、現第19期理事会で時限特別措置の期限を迎えることの説明がなされた。

■細則 第2章 役員の選出

第2条

- 5) 時限特別措置(17期-19期までの6年程度)として、理事定員30名の10%(3名)の女性理事枠を設ける。選挙により3名の女性当選者が選出されなかった場合は、女性理事が最低3名になるまで調整を行う。ただし、理事定員30名に変更はないものとする。

この期間の女性理事の人数は、17期⇒4名、18期⇒6名、19期⇒5名であり、この間に実施された理事選挙結果により、上記の時限特別措置が適用されたことは一度もなかったことが説明された。今回、この特別措置の期限が終わるので、第2条5)を削除するか、このまま再度の継続とするか、もしくは女性理事枠(定数)を増やすかといった点につき、自由討論に入り、活発な意見交換が行われた。女性理事枠の定数を設置しなくても、適正な人数の女性理事が選出されてくることが望ましい形であろうとの意見が多数を占めた。

審議の結果、この6年間当該特別措置の適用が無かったこと、また記載の目標値(10%)が低いことから、細則第2章 役員の選出の第2条にあ

る条文5)を削除することが承認された。

5) 第41回(2018年)年会長について

荒木理事長より、第41回年会については、年会長を東京医科歯科大学 難治疾患研究所長 石野史敏会員に依頼したいことが諮られ、承認された。(開催地:横浜、会期:2018年11月28日(水)~30日(金)〈2018年の会場については、2013年12月に仮押さえをしており、本年11月末が会場正式予約のデッドラインであった〉)

6) 第42回(2019年)および第43回(2020年)年会の開催地について(2020東京オリンピックに伴う会場調整対応)

2020東京オリンピックの開催に伴い、2019年から2020年にかけては、プレ会議・各種イベント、関連会議開催が非常に多く、本学会年会が開催できる会場確保について時間的余裕がないこと、さらに2021年から数年をかけて神戸会場(国際会議場および展示会場)が全面建替え工事に入ることが、荒木理事長より報告された。

従来、年会開催地は東西(横浜・神戸)交互の開催を基本にし、6~7年に1度、福岡を考慮するといった方法で決定してきた。過去には2年ずつ同じ会場を使用した時期もあるが、2年連続使用による会場費減額制度は現在はないこと、福岡会場については、現段階ですでに2019年のみが仮押さえ可能であること(予約デッドラインは本年12月)、2020年の神戸会場に関してもすでに同年11月下旬~12月中旬までひきあいが多く仮押さえの手続きが急務であることが、事務局より補足説明された。

審議の結果、第42回(2019年)年会の開催地は福岡(福岡国際会議場、マリノア)、第43回(2020年)年会の開催地は神戸(神戸ポートアイランド)とすることを決定し、会場予約手続きを進めることとした。

7) 年会のあり方について

年会のあり方について自由討論に入り、意見交換がなされた。提出された意見(主だった意見を抜粋)は以下のようなものである。

- ・本年7月、2017年の年会開催方式に関する持ち回り理事会の際にも申し上げたが、分子生物学会と、特に生化学会、さらに可能であればいくつか他の学会が恒久的コンソーシアムを形成できればよいと考えている。

(理由1) 分子生物学・生化学に関連する研究の分断化を防げる。

分子生物学・生化学の両方に関連する分野は多く、それらの分野は2つの学会によって

活動が断片化されてしまっている。結果的にどちらの学会も中途半端になり、魅力がないものになっている可能性がある。自分の関連する研究分野だけではなく、広く生命科学を俯瞰して議論するためにも大きな学会の存在意義はあると思うので、中途半端な断片化は防げるとよいと思う。研究室によっては、やむを得ず分子生物学会参加チームと、生化学会参加チームにわけているところもあり、研究室の活動も分断化されてしまう。多くの学生はどちらかにしか入っていないので、今後の将来を担う学生がより大きなダメージを受けているように思う。

(理由2) 国際スタンダードではない。

分子生物学会と生化学会を2回にわけて開催している国はもはやほとんどない。米国、カナダ、ドイツ、フランス、スペイン、イタリア、中国、韓国などすべて「society of biochemistry and molecular biology」である。IUBMB、FAOBMBなどの「BMB」もその流れだと思う。米国では、ASBMBに加えて、さらに他の学会も含めて大会を開催している。

(理由3) 大会の経済的理由

企業の協力が得にくくなっていて、運営が年々厳しくなっている。それを黒字化するために日本の優秀な研究者が多大な時間を割いている。コンソーシアム化すれば、状況はかなりよくなるのではないか。

- ・合同開催をやるにしてもその対象が生化学会だけというのはいかがなものか。遺伝学会、生物物理学会、細胞生物学会など、重複会員のいる学会はほかにもある。
- ・遺伝学会も十分に可能性はあると思うが、ただし2017年についてはすでに準備期間2年をきっており、時間が足りない。
- ・化学系、物理系と比べ、確かに生物系の学会は団結力に欠け、まとまりがない。
- ・学会は別々にあってもよいが、大会は1つでよいのではないか。
- ・独自に学術大会が開催できない学会では、そもそも、その学会の存在意味がないのではないか。そのような学会は自主的解散も視野に入れるべきではないか。
- ・小さい学会からみれば会員のオーバーラップ、重複分野のことが問題になるのだろうが、分子生物学会の会員13500名のうち、生化学会との重複は2200名弱しかいない。(※ BMB2015プログラム集の発送の際、印刷代と郵送料節約の

ために、重複会員は分子生物学会からのみ発送を行っている。そのときの両学会会員データ照合により、重複会員は2194名といったデータが執行部に提出されている)

分子生物学会側からみれば、13500のうちの2200を大きな数とみるのか、特段考慮することを必要としない数とみるのか、その見方による。

- ・生化学会との合同開催は、全体プログラムの編成において、面白みに欠けるように思う。
- ・合同開催は5年に1度くらいがよいと考えるが、それとは別に学術年会のあり方の長期的ビジョンが必要ではなかろうか。
- ・大会の英語化も中途半端な状況にある。たとえば専門学会は英語化を進め、分子生物学会のような他分野のことを勉強したい学会の議論は日本語がよいのではないか。
- ・生化学会との関係を議論することは重要だと思うが、数百名から始まった分子生物学会の生い立ち、文化を無視することはできない。
- ・規模は違うが、発生物学会と細胞生物学会にも同じような課題があるなか、合同開催は一定の成果が出ている。毎年ではないが、5年に1回くらい合同開催を行うといったことで落ち着きそうである。ただし、この場合は、年会長は一人でやるのが大切である。
- ・IUBMBのような国際組織からプロポーズがあった場合にはきちんと対応すればよい。この問題を検討するワーキンググループのような会合が立ち上がるのならば、メンバーに加わりたい。
- ・合同開催の場合、両学会からの大会長を一人(同一人物)にしたらいのではないか。
- ・学生の経済的負担を考えれば、生命科学系で大きな大会は1つで充分である。

・5年後、10年後の会員構成(会員数の減少)を考えると、なにか変革がないと両学会が生き残るのは難しいではなかろうか。

・両学会の会員の減り方にはだいぶ違いがあるように見える。分子生物学会がある時期に爆発的に大きくなった点、生化学会に比べ会員の減少が比較的ゆるやかな点、現在も分子生物学会に若い会員の比率が多い点には、それぞれにそれなりの理由があるのだと思う。分子生物学会のよいところは、組織も考え方も緩いところ、なんでも吸収しやすいといった、懐ろの深い柔軟な文化があり、それを大事にしてほしい。

・懇談会形式でもよいので、一度、両学会から数名ずつ委員を出し合い、意見交換会を行ったかどうか。

・第16期の将来計画検討委員会でも年会のあり方(開催形式)について検討を行ったが、当時も学会そのものの統合・再編問題にふれたことはない。

以上、活発な討議の結果、荒木理事長より今期中に本案件を検討する委員会(または他学会を含めた会合)を考えてみたいとの方針が示された。

上記、第19期第2回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2015年11月30日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第19期第2回理事会
議 長 荒 木 弘 之 ㊟
議事録署名人 糸 昭 苑 ㊟
議事録署名人 眞 貝 洋 一 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 平成 28 年度 (第 38 回) 通常総会記録

日 時：平成 27 年 12 月 2 日(水) 18:15 ~ 18:55

場 所：神戸国際展示場 2 号館 1 階

(ポスター・展示会場 3) 特設会場

社員数 (正会員 + 名誉会員 + シニア会員 + 次世代教育会員):
9,160 名

出席者数: 5,055 名 (本人出席 60 名, 表決委任者 4,995 名)

議事内容:

1. 定款第 25 条に基づき、荒木弘之理事長より本総会議長として菅澤薫会員が指名された。さらに定款第 29 条に基づき、議事録署名は、影山龍一郎会員 (第 38 回年会会長兼) と荒木理事長が担当することが確認された。

2. 菅澤議長より、定款第 26 条 (総会の定足数) に基づき、上記表決委任者 (委任状) を含めて出席 5,055 名となり、本総会は成立する旨報告された。

3. 経過報告 (事業報告)

1) 理事長報告

荒木理事長より、総会資料 (1 頁: 2015 年度事業報告) に基づき、事業活動全般と、さらに下記 5 点について報告が行われた。

① 内閣府からの依頼で「第 5 回 日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議」(2015.1.22 開催) に出席し、理事長個人の立場としてヒアリングに応じた。

② 本年 3 月 ~ 5 月、大学附置研究所等の『共同利用・共同研究拠点』継続に関するサポートレターを 4 施設に対し理事長名で提出した。対象の施設からはいずれも 2009 年に拠点認定のための要望に対する協力依頼を受けており、その際に執行部が中心となり審査した上で応じたという経緯があり、当時の第 16 期理事会で審議・承認された案件であることから、今回の対応とした。

③ AMED (日本医療研究開発機構) からの要望で、基礎科学分野からの唯一の参画として、本学会理事長として AMED アドバイザリーボード委員になった。理事長任期は 2 年であるため、次期理事長においても同アドバイザリーボード委員を引き継いでもらいたいと考えている。

④ 11 月 30 日に開催された第 19 期第 2 回理事会において、第 41 回 (2018 年) 年会については、石野史敏会員 (東京医科歯科大学・難治疾患研究所長) に年会長をお願いすることが決定した。

さらに同理事会において、第 42 回 (2019 年) 年会開催地は福岡、第 43 回 (2020 年) 年会開催地を神戸とすることが決定した。これは

2020 年東京オリンピック開催に伴う関連会議の増加により会場確保が困難であることと、神戸会場 (国際会議場および展示会場) が 2021 年より全面建替え工事に入ることなどを受けて、早めの会場確保が必要となったためである。

⑤ 11 月 30 日開催の同理事会において、年会のあり方について活発な討論が行われたことが報告された。

2) 庶務報告

本間美和子庶務幹事より以下の報告が行われた。

① 会員現況: [2015 年 11 月 16 日現在] 名誉会員 1 名、正会員 9,119 名、シニア会員 36 名、次世代教育会員 4 名、学生会員 4,286 名、賛助会員 27 団体、総計 13,473 名 (前年 11 月対比、- 324)

② 生命科学教育事業について

篠原彰担当理事を中心として活動を続けている。

・会員のボランティア協力を募って人材データベースを作成して、講師派遣を希望する高校等とのマッチングを行い、これまでにのべ 34 件の出前授業を実施した。

・年会における高校生発表を 2012 年から続けており、合同大会である本年も実施した。

③ 11 月 30 日に開催された第 19 期第 2 回理事会において、細則の一部が改正された。細則第 2 章 役員を選出 第 2 条に、時限特別措置 (17 期-19 期までの 6 年程度) として女性理事枠を設けていたが、その期限が終了するに際して、時限どおりに同措置を削除することが理事会にて決定された (詳細は第 19 期第 2 回理事会記録を参照)。

④ キャリアパス委員会も活発に委員会活動を行っている。本年会 (BMB2015) 会期中には 2 つのランチョンセミナー「研究者のライフイベントを考える—目指すべき制度改正と環境改善—」(初日、日本生化学会男女共同参画推進委員会との共同企画)、「本当の PI になるために」(2 日目) を開催し、盛況であった。

3) 編集報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』について以下の報告が行われた。

① 従来の「Original Article」に加え、重要な発見を迅速に出版することを目的とした短めのフォーマットである「Brief Report」受付を開始している。新たな投稿規定が浸透してきた効果もあり、2014 年に減少していた投稿数も、

本年は一昨年レベルに持ち直してきている。

- ②本誌では、投稿前に研究内容に近いエディターあるいはアソシエートエディターに相談することが可能なので、その機会を是非活用していただきたい。
- ③2011年に一新した本誌の表紙デザイン（伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を盛り込んでいる）は、丸5年となる今日でも高い評価を得ている。本年会のポスター会場の一画において、本誌の表紙ができるまでの裏話を盛り込んだタペストリー36作品（3年分）を展示している。

4. 議事

1) 平成27年度（2015年度）決算承認の件

水島昇会計幹事より総会資料（2～14頁）に基づき、平成27年度活動計算書の収支について詳細報告が行われた。

昨年の総会において前会計幹事から説明しているように、所管庁である東京都からの指導があり本年度決算よりNPO法人会計基準に基づいた計算書となっている。本決算の監査については、以下のように報告された。

2015年10月26日、公認会計士宮城秀敏氏の会計監査を受け（総会資料の独立監査人の監査報告書を参照）、同年11月12日に辻本賀英監事、花岡文雄監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 平成28年度（2016年度）活動予算書承認の件

水島会計幹事より総会資料（15～17頁）に基づき、28年度活動予算書について説明が行われた。

審議の結果、同活動予算書は異議なく承認された。

5. 第38回（2015年）年会長挨拶

影山龍一郎第38回年会長より挨拶があり、年会開催状況についての報告が行われた。本年会は日本生化学会との合同大会BMB2015として開催中である。多数の来場があり、参加者への謝辞が述べられた。

6. 第39回（2016年）年会長挨拶

一條秀憲第39回年会長より挨拶があり、2016年の年会開催企画案について報告が行われた。

・会期：2016年11月30日(水)～12月2日(金)

・会場：パシフィコ横浜

《年会開催コンセプト》

「半端なベクトルに出口無し！～徹底した基礎研究から広がる応用～」

本年会は、オーソドックスに研究発表と討議に没頭し、ひたすら基礎研究に徹することの楽しさと底力を再確認できる場にしたいとの説明がなされた。

7. 第40回（2017年）年会長挨拶

篠原彰第40回年会長より挨拶があり、2017年の開催方針について報告が行われた。

・会期：2017年12月6日(水)～9日(土)

・会場：神戸ポートアイランド

開催形式は日本生化学会との合同大会を予定しており、特に若手研究者のための年会となるよう、今後、企画をつめていきたいとの説明がなされた。また、年会の運営は、展示・広告・ランチョンセミナー等、協賛企業のサポートで成り立っていることを鑑み、理事各位にも出展企業への協力対応をお願いしたいと要望された。

8. 菅澤議長より閉会の挨拶があり、第38回総会が終了した。

上記、平成28年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成27年12月2日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
平成28年度通常総会
議長 菅澤 薫 ㊟
議事録署名人 荒木 弘之 ㊟
議事録署名人 影山 龍一郎 ㊟

平成 27 年度 (2015 年度) 決算報告

平成 27 年度 (2015 年度) 活動計算書

平成 26 年 10 月 1 日から平成 27 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取入会金		
正会員受取入会金	458,000	
学生会員受取入会金	1,133,000	1,591,000
2 受取会費		
正会員受取会費	55,450,500	
学生会員受取会費	9,210,500	
賛助会員受取会費	1,240,000	
シニア会員受取会費	3,000	65,904,000
3 受取寄付金	6,000,000	6,000,000
4 受取助成金	718,200	718,200
5 事業収入		
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	212,993,442	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	21,686,580	
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	234,680,022
6 その他収益		
受取利息	19,149	
雑収入	107,000	126,149
経常収益計		309,019,371
II 経常費用		
1 事業費		
(1)人件費		
給与手当	10,937,831	
法定福利費	1,750,843	
福利厚生費	26,111	
人件費計	12,714,785	
(2)その他経費		
業務委託費	118,702,916	
編集業務費	5,138,315	
印刷費	19,861,119	
通信運搬費	7,992,132	
旅費交通費	17,087,580	
会議費	1,204,246	
支払手数料	1,364,426	
消耗品費	3,125,871	
会場費	48,426,841	
機材費	16,887,852	
諸会費	70,000	
広報費	755,624	
補助金	2,000,000	
雑費	1,226,350	
その他経費計	243,843,272	
事業費計		256,558,057
2 管理費		
(1)人件費		
給与手当	16,030,968	
法定福利費	2,561,586	
福利厚生費	38,209	
人件費計	18,630,763	
(2)その他経費		
事務所家賃	4,117,752	
業務委託費	1,514,160	
会員管理システム運用管理費	2,462,400	
印刷費	1,775,710	
通信運搬費	3,698,342	
旅費交通費	1,276,650	
会議費	221,680	
支払手数料	1,286,421	
消耗品費	550,985	
雑費	499,531	
租税公課	2,204,100	
特定預金支出 (退職給付引当金)	1,540,200	
その他経費計	21,147,931	
管理費計		39,778,694
経常費用計		296,336,751
当期正味財産増加額		12,682,620
前期繰越正味財産額		186,765,555
次期繰越正味財産額		199,448,175

平成 27 年度（2015 年度）貸借対照表

平成 27 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	276,952,279		
前払費用	4,683,056		
立替金	8,274,948		
流動資産合計		289,910,283	
2 固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			291,712,284
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	89,813		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	2,134,100		
前受会費	532,000		
前受金	1,000,000		
預り金 1 富澤基金	79,674,666		
預り金 2	143,730		
流動負債合計		83,644,309	
2 固定負債			
退職給付引当金	8,619,800		
固定負債合計		8,619,800	
負債合計			92,264,109
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		186,765,555	
当期正味財産増加額		12,682,620	
正味財産合計			199,448,175
負債及び正味財産合計			291,712,284

(単位：円)

平成27年度(2015年度)財産目録

平成27年9月30日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金	26,771	
郵便振替 00110-1-901302	31,601,924	
普通預金 三菱東京UFJ銀行 春日町支店	549,890	
普通預金 三菱東京UFJ銀行 所沢支店	523,322	
普通預金 三菱UFJ信託銀行 上野支店	221,828	
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	67,810,010	
普通預金 三井住友信託銀行 芝営業部	334,898	
普通預金 静岡銀行 東京営業部	4,674,666	
定期預金 三菱東京UFJ銀行 春日町支店	10,112,608	
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,096,362	
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	30,000,000	
定期預金 三菱UFJ信託銀行 上野支店	10,000,000	
定期預金 三井住友信託銀行 芝営業部	36,000,000	
定期預金 静岡銀行 東京営業部	75,000,000	
前払費用 事務所家賃 10月分	321,598	
前払費用 事務所火災保険 H27.10 - H28.9	11,458	
前払費用 2015年分 Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	
立替金 編集経費(2015年1月分以降)	8,274,948	
流動資産合計		289,910,283
2 固定資産		
工具器具備品 電話取付一式	1	
敷金 学会事務所・編集室	1,802,000	
固定資産合計		1,802,001
資産合計		291,712,284
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金 通信運搬費 (宅急便代、NTT、メールサーバ)	35,475	
未払金 印刷費(コピー・FAX代)	29,974	
未払金 支払手数料(クレジットカード決済処理)	14,212	
未払金 雑費(外部倉庫)	10,152	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	2,134,100	
前受会費 平成28年度以降会費	532,000	
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
預り金1 富澤基金	79,674,666	
預り金2 源泉所得税	143,730	
流動負債合計		83,644,309
2 固定負債		
退職給付引当金	8,619,800	
固定負債合計		8,619,800
負債合計		92,264,109
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	186,765,555	
当期正味財産増加額	12,682,620	
正味財産合計		199,448,175
負債及び正味財産合計		291,712,284

(単位：円)

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

平成 27 年度（2015 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●平成 27 年度（2015 年度）富澤基金 決算報告書

平成 26 年 10 月 1 日から平成 27 年 9 月 30 日まで

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
預金利息	19,467	
当期収入合計	19,467	
前期繰越金	95,139,500	
合 計	95,158,967	
支出の部		
研究助成金	15,000,000	第 5 回研究助成者は 5 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	157,829	ヒアリング（2015.5.9）
選考経費 / 旅費	198,900	〃
事務・雑費	127,572	貸金庫使用料（静岡銀行）25,920 円、 送金手数料等 7,452 円、遠方からのヒアリング 出席者（*不採択）旅費支払 94,200 円
当期支出合計	15,484,301	
次期繰越金	79,674,666	
合 計	95,158,967	

●平成 27 年度（2015 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 27 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	4,674,666	流動負債	0
定期預金	75,000,000	基金会計（期首）	95,139,500
		今年度収支差額	- 15,464,834
		基金正味財産	79,674,666
合 計	79,674,666	合 計	79,674,666

●平成 27 年度（2015 年度）富澤基金 財産目録

平成 27 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京営業部	4,674,666
定期預金	静岡銀行 東京営業部	75,000,000
合 計		79,674,666

平成 27 年度 (2015 年度) 計算書類の注記

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO 法人会計基準 (2010 年 7 月 20 日 2011 年 11 月 20 日一部改正 NPO 法人会計基準協議会) によっております。

(1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却は定率法を採用しております。

(2) 引当金の計上基準

退職給付引当金は従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務に基づき当期末に発生していると認められる金額を計上しております。

なお、退職給付債務は期末自己都合要支給額に基づいて計算しております。

(3) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式を採用しております。

2. 事業費の内訳

別紙 (50 頁参照)

3. 固定資産の増減内訳

(単位: 円)

科目	期首取得価額	取得	減少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
工具器具備品	955,847	0	0	955,847	955,846	1
敷金	1,802,000	0	0	1,802,000	0	1,802,000
合計	2,757,847	0	0	2,757,847	955,846	1,802,001

【監査報告】

平成 27 年度 (2015 年度) 決算に関して、平成 27 年 10 月 26 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 27 年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 12 日に、学会事務所において、辻本賀英監事、花岡文雄監事による監査を終了しました。(両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた) ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 19 期理事長 荒木 弘之
理事 (会計幹事) 水島 昇

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 荒木 弘之 殿

平成27年11月12日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 花岡 文雄(印)

平成27年11月12日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 花岡 文雄(印)

私たちは、日本分子生物学会の平成27年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

平成27年10月26日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 荒木 弘之 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士 荒木 弘之(印)

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成26年10月1日から平成27年9月30日までの平成27年度の計算書類、すなわち、活動計算書、貸借対照表及び財産目録並びに平成26年10月1日から平成27年9月30日までの平成27年度の當澤基金 会計報告、すなわち、當澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者であり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積り等の評価も含め全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成27年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 當澤基金 の平成27年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

平成28年度(2016年度)活動予算書

平成28年度(2016年度)活動予算書

平成27年10月1日から平成28年9月30日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取入会金		
正会員受取入会金	500,000	
学生会員受取入会金	1,200,000	1,700,000
2 受取会費		
正会員受取会費	58,000,000	
学生会員受取会費	10,000,000	
シニア会員受取会費	100,000	
次世代教育会員受取会費	100,000	
賛助会員受取会費	1,200,000	69,400,000
3 受取寄付金	7,800,000	7,800,000
4 受取助成金	1,800,000	1,800,000
5 事業収入		
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	154,720,000	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	14,000,000	
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	168,720,000
6 その他収益		
受取利息	20,000	
雑収入	150,000	170,000
経常収益計		249,590,000
II 経常費用		
1 事業費		
(1)人件費		
給与手当	11,500,000	
法定福利費	1,850,000	
福利厚生費	20,000	
人件費計	13,370,000	
(2)その他経費		
業務委託費	95,200,000	
編集業務費	4,500,000	
印刷費	16,200,000	
通信運搬費	7,200,000	
旅費交通費	14,200,000	
会議費	1,100,000	
支払手数料	1,140,000	
消耗品費	2,400,000	
会場費	36,130,000	
機材費	12,570,000	
諸会費	70,000	
広報費	400,000	
補助金	5,000,000	
雑費	1,300,000	
その他経費計	197,410,000	
事業費計		210,780,000
2 管理費		
(1)人件費		
給与手当	16,300,000	
法定福利費	2,650,000	
福利厚生費	60,000	
人件費計	19,010,000	
(2)その他経費		
事務所家賃	4,100,000	
業務委託費	1,600,000	
会員管理システム運用管理費	2,700,000	
印刷費	1,800,000	
通信運搬費	3,700,000	
旅費交通費	2,000,000	
会議費	300,000	
支払手数料	1,300,000	
消耗品費	600,000	
雑費	550,000	
租税公課	2,000,000	
特定預金支出(退職給付引当金)	1,600,000	
その他経費計	22,250,000	
管理費計		41,260,000
経常費用計		252,040,000
当期正味財産増加額		△ 2,450,000
前期繰越正味財産額		199,450,000
次期繰越正味財産額		197,000,000

(単位：円)

平成 28 年度 (2016 年度) 活動予算 事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
(単位: 円)

科 目	(1) 学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				(2) 分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3) その他目的を達成するために必要な事業				合計	
	年会(BMB2015 分子生物学会 負担分)	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ 関係	社会貢献・教育活動	各種委員会 (キャリアパス、男女共同参画、その他)	事業費その他 (研究調理、その他)	事業費計	管理部門	合計	
I 経常収益														
1. 受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,700,000	1,700,000	
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	69,400,000	69,400,000	
3. 受取寄付金	7,800,000	0	0	0	0	0	0	0	0	7,800,000	0	7,800,000	7,800,000	
4. 受取助成金	1,800,000	0	0	0	0	0	0	0	0	1,800,000	0	1,800,000	1,800,000	
5. 事業収入	154,720,000	0	0	0	0	0	0	0	0	154,720,000	0	154,720,000	154,720,000	
(1) 学術集会、研究発表会、講演会による分子生物学に関する学術研究事業	0	0	0	0	14,000,000	0	0	0	0	14,000,000	0	14,000,000	14,000,000	
(2) 分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
(3) その他目的を達成するために必要な事業	154,720,000	0	0	0	14,000,000	0	0	0	0	168,720,000	0	168,720,000	168,720,000	
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	170,000	170,000	
経常収益計	164,320,000	0	0	0	14,000,000	0	0	0	0	178,320,000	0	178,320,000	249,590,000	
II 経常費用														
(1) 人件費														
給与手当	3,900,000	0	0	780,000	780,000	0	1,200,000	1,400,000	2,840,000	600,000	11,500,000	16,300,000	27,800,000	
法定福利費	630,000	0	0	120,000	120,000	0	190,000	230,000	460,000	100,000	1,850,000	2,650,000	4,500,000	
福利厚生費	10,000	0	0	0	0	0	0	0	10,000	0	20,000	60,000	80,000	
人件費計	4,540,000	0	0	900,000	900,000	0	1,390,000	1,630,000	3,310,000	700,000	13,370,000	19,010,000	32,380,000	
(2) その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,100,000	4,100,000	
業務委託費	88,000,000	300,000	0	0	0	4,350,000	2,000,000	150,000	330,000	50,000	95,200,000	1,600,000	96,800,000	
編集業務費	0	0	0	0	4,500,000	0	0	0	0	0	4,500,000	0	4,500,000	
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,700,000	2,700,000	
印刷費	12,100,000	0	0	3,600,000	0	0	150,000	300,000	50,000	16,200,000	18,000,000	10,900,000	18,000,000	
通信運搬費	3,200,000	0	0	4,000,000	0	0	0	0	0	7,200,000	3,700,000	10,900,000	10,900,000	
旅費交通費	12,000,000	200,000	0	0	800,000	0	0	600,000	100,000	14,200,000	2,000,000	16,200,000	16,200,000	
会議費	700,000	0	0	0	0	0	0	400,000	0	1,100,000	300,000	1,400,000	1,400,000	
支払手数料	930,000	0	0	0	20,000	0	0	100,000	70,000	1,140,000	1,300,000	2,440,000	2,440,000	
消耗品費	2,200,000	0	0	200,000	0	0	0	0	0	2,400,000	600,000	3,000,000	3,000,000	
会場費	36,000,000	30,000	0	0	0	0	0	100,000	0	36,130,000	0	36,130,000	36,130,000	
機材費	12,570,000	0	0	0	0	0	0	0	0	12,570,000	0	12,570,000	12,570,000	
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	20,000	50,000	70,000	0	70,000	70,000	
広報費	0	0	0	0	0	0	0	200,000	0	400,000	0	400,000	400,000	
補助金	0	0	5,000,000	0	0	0	0	0	0	5,000,000	0	5,000,000	5,000,000	
雑費	1,200,000	0	0	0	0	0	0	100,000	0	1,300,000	550,000	1,850,000	1,850,000	
租税公課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,000,000	2,000,000	
特定預金支出 (返贈給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,600,000	1,600,000	
その他経費計	168,920,000	530,000	5,000,000	7,800,000	5,320,000	4,350,000	2,000,000	1,300,000	1,940,000	197,410,000	22,250,000	219,660,000	219,660,000	
経常費用計	173,460,000	530,000	5,000,000	8,700,000	6,220,000	4,350,000	3,390,000	2,930,000	5,250,000	210,780,000	41,290,000	252,040,000	252,040,000	
増減額	-9,140,000	-530,000	-5,000,000	-8,700,000	7,780,000	-4,350,000	-3,390,000	-2,930,000	-5,250,000	-950,000	30,010,000	-2,450,000	-2,450,000	

※第 38 周年会収支については、BMB2015 全体予算 (2015.10 現) のうちの 6 割を、分子生物学会へ振り分けて採計上としています。

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 相賀裕美子
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 塩見 春彦
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がありましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

研究助成一覧

名称	連絡先	件数	締切	助成内容等	概要
第47回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 ☎(03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内 2-3-1	総額 2億5,900万円	2016年 2月2日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
山田科学振興財団 2016年度研究援助		15件程度 (本学会の 推薦枠は5件)	2016年 2月26日	1件当たり 100～500万円、 総額3,000万円	自然科学の基礎的研究に対して の研究費援助。 「推薦書は山田財団HPより ダウンロード [http://www.yamadazaidan.jp/]
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2018年開催)	(公財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1	総額 800万円以内	2015年 4月1日～ 2016年 2月26日 (募集期間)	総額 800万円以内	以下の要件を満たす学術集會を 山田コンファレンスもしくは山 田シンポジウムと称し、これら の開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマにつ いて、国際的視野で最高レベ ルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によっ て、若い世代の研究の発展の 基礎を構築する。 ③異分野間の交流を図り、cross- disciplinary な討論を通じて新 しい発展を模索する。 詳細 山田財団 HP 参照。
第32回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1724 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 日本学術振興会内	1件 (1件)	2016年* 4月15日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に 優れた業績を挙げ、世界の学術 進歩に大きな貢献をした研究者。 第31回の授賞分野は「細胞生物 学」。
平成28年度 持田記念学術賞		2件以内 (1件)	2016年* 7月22日	1件 1,000万円	学術賞は次の6項目の研究分野 で、研究の進歩発展のため顕著 な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端 医療に関する研究
平成28年度 研究助成	(公財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒 160-0003 新宿区本塩町 7-6 四谷ワイズビル	総額 2億7,000万円	2016年* 6月7日	1件 300万円	(2)バイオ技術を基盤とするゲノム 機能/病態解析に関する研究 (3)免疫/アレルギー/炎症の治 療ならびに制御に関する研究
平成28年度国内また は海外留学補助金		総額 1,000万円	2016年* 6月7日	1件 50万円	(4)循環器/血液疾患の病態解析/ 治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
平成29年度笹川科学 研究助成	(公財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル	生物系で87件 (27年度実績)	募集期間 2016年* 10月1日～ 10月15日	1件当たり100万 円まで	人文・社会科学および自然科学 (医学を除く)の独創性・萌芽性 をもつ研究に関するもの。4月1 日現在、35歳以下の若手研究者 へ助成。
上原賞	(公財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2件以内 (1件)	2016年* 9月2日	金牌、 2,000万円	生命科学の東洋医学、体力医学、 社会医学、栄養学、薬学一般お よび基礎医学、臨床医学で顕著 な業績を挙げ、引き続き活躍中 の研究者。
第33回井上学術賞		5件以内 (2件)	2016年* 9月17日	賞状、金メダル、 200万円	自然科学の基礎的研究で特に顕 著な業績を挙げた者(ただし締 切日現在満50歳未満)。
第33回井上研究奨励賞	(公財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	40件	2016年* 9月16日	賞状及び銅メダル、 50万円	過去3年間に、理学・工学・医学・ 薬学・農学等の自然科学の基礎 的研究において、新しい領域を 開拓する可能性のある優れた博 士論文を提出し博士の学位を取 得した研究者で、37歳未満の者
第9回井上リサーチ アワード		4名以内 (うち1名以上 女性研究者)	2016年* 7月29日	1人当たり 500万円	開拓的発展を目指す若手研究者 の独創性と自立を支援する目的 で、研究を助成。研究期間は2年。
第25回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学振 興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1件 (1件)	2016年* 9月30日	賞状、 200万円	最近において生命科学の分野で 優れた独創的研究を行っている 国内の研究者で、原則として締 切日現在50歳以下の者。
住友財団2016年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル2号館	総額 1億6,000万円 90件程度	2016年* 6月30日 (受付番号のWeb取得 締切日:6月16日)	1件当たり500万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にまた がる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人または グループ)を対象とする。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 57 回藤原賞	(公財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2016 年 1 月 31 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属するもの。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
平成 29 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞86件(年)のうち、研究部門は37件(28年度)若手科学者賞は100名程度(学会推薦枠は定まっていないが推薦は若干名まで)	2016 年* 7 月 25 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は発明を行った個人又はグループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を挙げた40歳未満の若手研究個人。
平成 28 年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445	1 件 (推薦枠は若干件)	2016 年* 9 月 30 日	賞状、賞牌、副賞 500 万円	科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究において、著しい成果をあげた功労者を対象とする。
島津科学技術振興財団研究開発助成	京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	総額 1,200 万円	2016 年* 9 月 30 日	1 件当たり 100 万円以下	上記同様に研究対象とする、国内の研究機関に所属する45歳以下の新進気鋭の研究者。国籍不問。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 ☎ (03) 6262-1655 〒 103-0021 中央区日本橋本石町 3-3-16 (日本橋室町ビル)	2 件前後 (2 件)	2016 年* 10 月 7 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	理学・工学・農学・薬学・医学(除・臨床医学)の分野で、学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、効果が大きい重要な発明をした者、技術上の重要問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1億3,000万円 10 件程度 (2 件)	2016 年* 10 月 7 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者(原則として45歳以下)。
ノバルティス研究奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 6899-2100 〒 106-6333 港区虎ノ門 1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー 29F	約 35 件 指定機関からの推薦必要	2016 年* 9 月 16 日	1 件 100 万円	生物・生命科学、関連する化学および情報科学の領域における創造的な研究に対して助成。
第 48 回内藤記念科学振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3861 〒 113-0033	1 件 (1 件)	2016 年* 10 月 1 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 48 回海外学者招へい助成金	文京区本郷 3-4-6 NKD ビル 8 階	前期・後期各 10 件以内 (前期・後期 各々 1 件)	2016 年* 6 月 1 日・ 10 月 1 日	1 件 20～80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者(当該学術集会の組織委員長)に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成		15 件以内	2016 年* 10 月 7 日	1 件 80～100 万円	脳科学の広い分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸晃記念賞	(公財)ブレインサイエンス振興財団	1 件		賞牌ならびに 副賞 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている50歳以下の研究者。
海外派遣研究助成	☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	若干件	2017 年* 1 月 8 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
平成 29 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	20 件程度	2016 年* 11 月 14 日	1 件 250 万円	有機化学(材料化学を含む)及び生化学並びに関連分野における研究が助成対象。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第13回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 ☎ (03) 3263-0912 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1	25 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あり)	2016 年* 4 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者 (45 歳未満)。
第7回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2016 年* 6 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰 (34 歳未満)。
(一財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2016 年* 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の4分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 28 年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	20～30 件 総額 5,000 万円	2016 年* 7 月 15 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2016 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4～5 件 (1 件)	2016 年* 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第28回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	28 件程度	2016 年* 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。40 歳以下の研究者。
第6回三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 5422-9898 〒 150-0012 渋谷区広尾 1-6-10 ジラフファビル	自然科学部門 で2件以内 (2 件)	2016 年* 9 月 30 日	1 件 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
平成 28 年度三島海雲学術研究奨励金		全部門計 50 件程度	2016 年 1 月 10 日 ～2 月 29 日	個人研究奨励金は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
第4回ヤマト科学賞	ヤマト科学(株)内 ヤマト科学賞選考委員会事務局 ☎ (03) 5639-7070 〒 135-0047 江東区富岡 2-11-6 HASEMAN ビル	1 件	2016 年* 11 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 100 万円	独創性、創造性に富む、気鋭の研究者を顕彰。対象分野はライフサイエンス、マテリアルサイエンス、インフォメーションサイエンス等の自然科学、技術分野およびその融合領域分野。
平成 28 年度小野医学研究助成	(公財)小野医学研究財団 ☎ (06) 6232-1960 〒 541-8526 大阪市中央区道修町 2-1-5	10 件以内	2016 年* 6 月 1 日～ 7 月 31 日 (受付日)	1 件 200 万円	助成テーマは脂質代謝異常に伴う疾患の病態生理に関する研究 (27 年度)。①基礎医学②臨床医学③疫学④薬学⑤その他の領域 研究奨励助成は満 40 歳以下に限る。
平成 28 年度小野医学研究奨励助成		10 件以内		1 件 100 万円	

●件数の () 内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○未来を拓く高圧力科学技術セミナーシリーズ(41) 「生命科学における高圧力研究の異分野融合」

日 時：2016年3月17日(木) 13:00～17:30
会 場：青山学院大学青山キャンパス
17号館17410講義室
(〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25)
http://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/access.html#anchor_01

主 催：日本高圧力学会

世 話 人：青山学院大学理工学部 阿部文快

趣 旨：生命科学における高圧力研究は、サイズや時間スケールが広範囲にまたがる。タンパク質や脂質、核酸など直接目で見ることのできない分子の挙動、光学顕微鏡なら可視化できる単一細胞、そして目で見て手で触れ食感として認識される食材の加工など幅広い。目的も方法論も実に多様で、ある意味“異分野研究”の集合体といえる。本セミナーでは各分野のエキスパートにご講演いただき、領域をまたぐ知見と人脈の異分野交流を図りたい。

定 員：最大150名

参加費：一般 3,000円、学生 1,000円

申込期限：2016年3月10日(木)

申込方法：日本高圧力学会ホームページ (<http://www.highpressure.jp/activity/seminar/>) 「参加申し込みフォーム」をご利用ください。あるいは、E-mailまたはFaxにて「セミナー(41)」と表記し、下記の【申込先】宛に必要な事項を明記してお申し込みください。なお、参加申し込みの状況によっては、当日受付にも対応いたします。

- ①氏名 ②勤務先・学校名 ③連絡先住所
- ④電話・Fax・E-mail アドレス
- ⑤送金方法・金額・送金日

申 込 先：日本高圧力学会 セミナー41事務局
〒530-0001 大阪市北区梅田1-11-4
大阪駅前第4ビル9階923-674号
株式会社ポラリス・セクレタリーズ・オフィス(内)
Tel：070-5545-3188
Fax：020-4665-8596/06-6345-7931
E-mail：seminar41@highpressure.jp

プログラム：

- 13:00～13:05 開会の辞：世話人
- 13:05～13:45 加藤千明(海洋研究開発機構)
基調講演
- 13:45～14:15 北原 亮(立命館大学)
- 14:15～14:45 渡邊信久(名古屋大学)
- 14:45～15:15 石黒 亮(岐阜大学)
- 15:15～15:35 コーヒーブレイク
- 15:35～16:05 小野文久(岡山理科大学)
- 16:05～16:35 重松 亨(新潟薬科大学)
- 16:35～17:05 西海理之(新潟大学)
- 17:05～17:10 閉会の辞：世話人

○第18回マリンバイオテクノロジー学会大会

第18回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催します。

大会日程：平成28年5月28日(土)～5月29日(日)

会 場：北海道大学函館キャンパス(水産学部・大学院水産科学研究院)

大会役員：

大会会長

尾島孝男(北海道大学大学院水産科学研究院・教授)

大会実行委員長

澤辺智雄(北海道大学大学院水産科学研究院・教授)

実行委員

岸村栄毅・酒井隆一・細川雅史・井上 晶・藤田雅紀・美野さやか・宇治利樹(北海道大学大学院水産科学研究院)、沖野龍文(北海道大学大学院環境科学院)、木下康宣・清水健志(北海道立工業技術センター)、前田高志(函館水産試験場)、備前 悟(函館市国際水産・海洋総合研究センター) (順不同)

大会事務局：

〒041-8611 函館市港町3-1-1

北海道大学大学院水産科学研究院内

第18回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会

E-mail：mb2016@fish.hokudai.ac.jp

(お問い合わせ等はメールでお願いします。)

市民講演会：

開催日 平成28年5月29日(日) 14:00～16:30

場 所 函館市国際水産・海洋総合研究センター
(<http://center.marine-hakodate.jp/>)

講演者 長沼 毅(広島大学・生物圏科学研究科)
「極限環境生物の生存戦略(仮題)」

(函館市国際水産・海洋総合研究センターの見学を含む)

大会の内容：

1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）
2. シンポジウム（一般、ミニ）

発表形式：

- 口頭発表：一般講演は質疑応答を含め15分
液晶プロジェクターを使用
ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰
を予定

一般講演のセッション：

1. 微生物
2. 微細藻類
3. 海藻・付着生物
4. 魚介類
5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラリーゼーション
7. 環境・環境適応
8. その他

発表申込みの締切：平成28年4月8日(金)必着

講演要旨の締切：平成28年4月8日(金)必着

事前参加登録の締切：平成28年4月28日(木)必着

事前参加登録費：会員5,000円 学生2,000円
非会員9,000円 学生非会員4,000円

当日参加費：会員7,000円 学生3,000円
非会員10,000円 学生非会員5,000円

懇親会費：一般7,000円 学生3,000円

※協賛頂きました団体（分子生物学会）の会員の方は、
当学会会員と同等の参加費で参加頂けます。なお、発表は学会会員に限ります。

講演申込み方法および参加登録方法：

詳細は大会ホームページでご確認ください。

第18回大会ホームページアドレス：

<http://marinebiotechnology.jp/mbt2016-HP/index.html>

学会ホームページ：

<http://marinebiotechnology.jp/>

○The 14th International Conference on Near-field Optics, Nanophotonics and related Techniques (NFO-14)

NFO-14では、近接場光学、プラズモニクス、ナノアンテナやそれらを応用したバイオイメーキングや分子センシングなどの最新の研究成果について議論します。また、NFO Schoolでは、近接場光学、ナノフォトンクスなどの基礎について学ぶことができます。是非、ご参加ください。

会 期：2016年9月4日(日)～9月8日(木)

会 場：アクトシティ浜松 コンgressセンター
(〒430-7790 静岡県浜松市中区板屋町111-1)

主 催：レーザ顕微鏡研究会

Special Guest：Dieter POHL (Switzerland)

基調講演：河田聡 (大阪大学)、
Mark I. STOCKMAN (Georgia State University, USA)

NFO School：

「Near-Field Coupling in Plasmonic Systems」

林真至 (神戸大学)

「Nonlinear Plasmonics」

Olivier J. F. MARTIN (Swiss Federal Institute of
Technology Lausanne, Switzerland)

「Revealing Optical Properties of Reduced-
Dimensionality Materials at Relevant Length Scales
Using Nanospectroscopic Imaging」

P. James SCHUCK (Lawrence Berkeley Laboratory,
USA)

お問い合わせ先：

静岡大学 川田善正

〒432-8561 静岡県浜松市中区城北3-5-1

TEL/FAX：053-478-1069/053-471-1128

Email：nfo-14@eng.shizuoka.ac.jp

Web：http://nfo-14.org/

第 19 期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2015年1月1日～2016年12月31日)

荒木 弘之 (遺伝研)

副理事長

佐々木裕之 (九大・生医研)

塩見美喜子 (東大・理)

理事

一條 秀憲 (東大・薬)

上村 匡 (京大・生命)

大隅 良典 (東工大・フロンティア研究機構)

岡田 清孝 (自然科学研究機構 / 龍谷大・農)

貝淵 弘三 (名大・医)

影山龍一郎 (京大・ウイルス研)

糸 昭苑 (東工大・生命理工)

小林 武彦 (東大・分生研)

小安 重夫 (理研・IMS)

斎藤 通紀 (京大・医)

相賀裕美子 (遺伝研)

塩見 春彦 (慶應大・医)

篠原 彰 (阪大・蛋白研)

白髭 克彦 (東大・分生研)

眞貝 洋一 (理研・和光)

杉本亜砂子 (東北大・生命)

高橋 淑子 (京大・理)

田畑 哲之 (かずさ DNA 研)

長田 重一 (阪大・IFReC)

仲野 徹 (阪大・医 / 生命機能)

林 茂生 (理研・CDB)

深水 昭吉 (筑波大・生命領域学際研究 C)

水島 昇 (東大・医)

山本 正幸 (基生研)

吉田 稔 (理研・和光)

吉村 昭彦 (慶應大・医)

渡邊 嘉典 (東大・分生研)

監事

辻本 賀英 (大阪府立成人病 C)、花岡 文雄 (学習院大・理)

幹事

庶務幹事 深川 竜郎 (阪大・生命機能)、本間美和子 (福島県立医大・医)

会計幹事 水島 昇 (東大・医)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 金井 正美 (医科歯科大・実験動物センター)、渡邊 嘉典 (東大・分生研)

集会幹事 仲野 徹 (阪大 / 第 38 回年会)、三浦 正幸 (東大 / 第 39 回年会)

第 19 期執行部

荒木理事長、深川庶務幹事、本間庶務幹事、金井広報幹事、渡邊広報幹事

Genes to Cells 編集長

柳田充弘 (沖縄科学技術大学院大学)

賞推薦委員会

相賀裕美子 (委員長)、一條秀憲、貝淵弘三、小安重夫、長田重一

研究助成選考委員会

塩見春彦 (委員長)、大隅良典、影山龍一郎、高橋淑子、林 茂生

国際会議支援・選考委員会

篠原 彰 (委員長)、眞貝洋一、杉本亜砂子、田畑哲之、仲野 徹

キャリアパス委員会

小林武彦 (委員長)、石井 優、井関祥子、岩崎 渉、大谷直子

小野弥子、胡桃坂仁志、須藤裕子、中川真一、東山哲也、柳田素子

研究倫理委員会

白髭克彦 (委員長)、岡田清孝、塩見美喜子、杉本亜砂子

生命科学教育

篠原 彰 (担当理事)

将来計画検討委員会

〈検討中〉

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」 第 2 期 基金運営委員会 (任期:2015年1月1日～2017年12月31日)

山本正幸 (委員長)、小原雄治 (副委員長)、上村 匡、大杉美穂

近藤 滋、塩見美喜子、東山哲也、荒木弘之 (職指定)

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2016年2月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社 イノベーション研究所
株式会社エー・イー企画
科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンター
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究開発本部企画推進グループ
コスモ・バイオ株式会社 開発部
サーモフィッシャーサイエンティフィック ライフテクノロジーズジャパン株式会社
第一三共株式会社 バイオ創薬研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 開発企画部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究推進部バイオ研究グループ
フナコシ株式会社
株式会社ボナック
三菱化学株式会社 経営戦略部門 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

(27社、50音順)

■第 39 回（2016 年）日本分子生物学会年会 公式サイト

URL: <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2016/>

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント

URL: <http://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

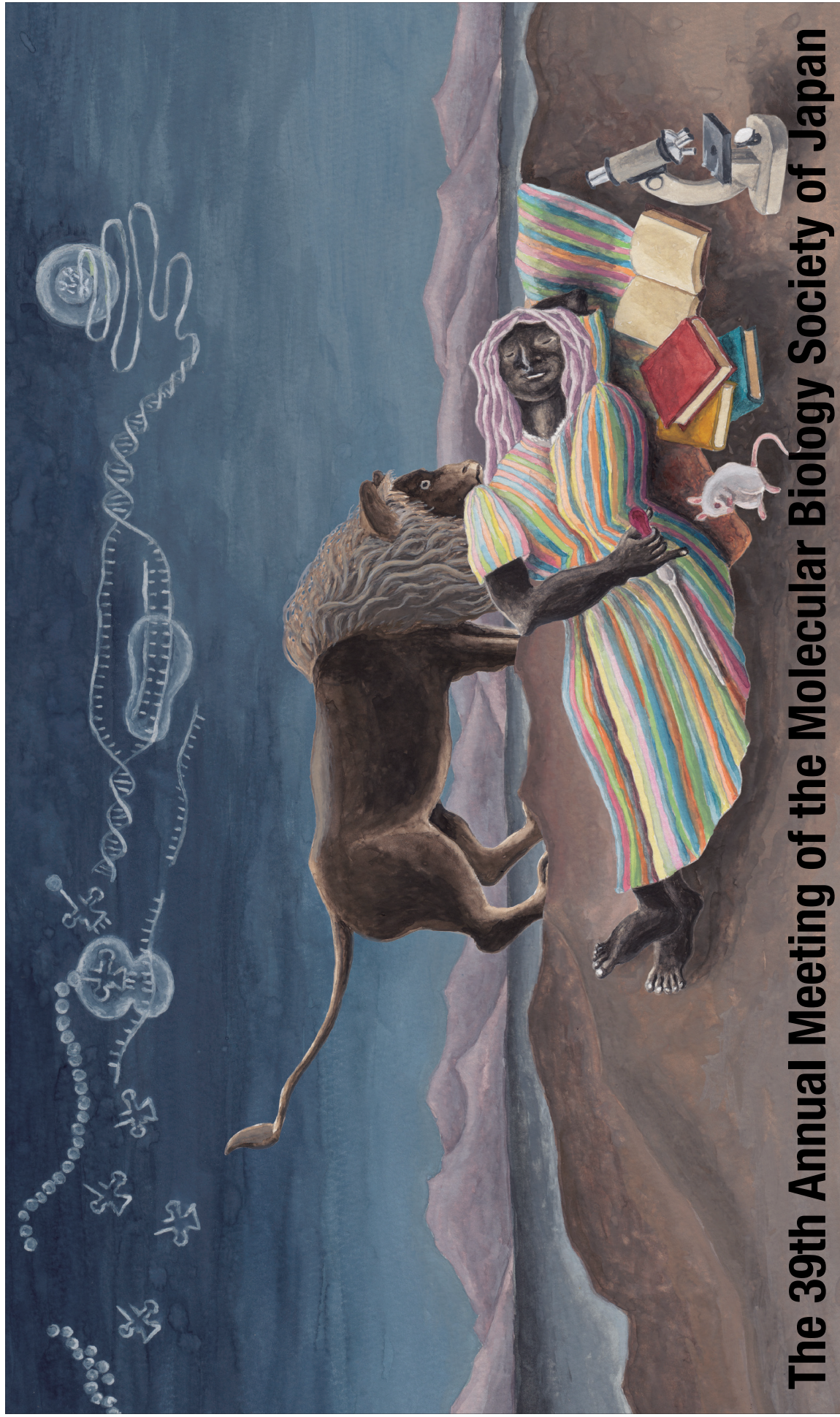
日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp



The 39th Annual Meeting of the Molecular Biology Society of Japan

第39回 日本分子生物学会年会

2016 11.30 [水] → 12.2 [金]

[年会長] 一條 秀憲 (東京大学)

[会場] パシフィコ横浜

[大会HP] <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2016>

[連絡先] 第39回日本分子生物学会年会事務局 (株式会社エーイー企画 内)

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 岩波書店一ツ橋別館4F
Tel: 03-3230-2744 Fax: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2016@aeplan.co.jp

[演題投稿受付期間] 2016 7.1 [金] → 7.29 [金]

[事前参加登録期間] 2016 7.1 [金] → 10.14 [金]



The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第113号 (2016年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——荒木 弘之